ソラト学園2
藍生 まか

登場人物

主な登場人物

甘露（９年生・木の精霊持ち）この物語の主人公
ダイヤ（９年生・火・土・風）甘露の友人
ヒイラギ（１１年生・水）クールビューティ
青嵐（１１年生・土・火）ヒイラギの秘密の恋人
ツェロ（１２年生・風）ヒイラギが好き（？）
白玉（６年生・水）双子
白月（６年生・水）双子
モミジ（７年生・風）ダイヤと仲良し。マゼンダが好き（？）
マゼンダ（７年生・木）モミジのクラスメイト。ダイヤが好き
東雲（９年生・土）甘露のクラスメイト。青嵐が好き（？）

寮の同室メンバー

甘露・ツェロ・白玉
ダイヤ・ヒイラギ・モミジ
青嵐・白月

これまでのお話

　甘露はソラト学園で魔法を学ぶ男の子。木の精霊持ちで、その能力を生かすために田舎から出てきて寮に入っている。クラスメイトのダイヤと仲良しで、いつも一緒だ。
　ある日、白月に頼まれて寮の部屋を代わったが、熱が出て動けなくなってしまう。白月と同室の青嵐に看病され、彼の優しさに気付く甘露。ところが見舞いに来たダイヤが、甘露と青嵐がキスをしていたと勘違いしてしまった。

甘露の不調

この世界ではないどこか。
人間と精霊たちが住まう国。
科学と魔法の入り混じった、不思議な世界の物語。

　それほど遠くない昔、精霊と人間は契約をした。人間が精霊を敬うことを忘れなければ、精霊は人間に力を与えると。それが魔法だ。
　高い山がいくつも連なる山地の中に、ソラト学園はあった。この人里離れた場所で、精霊に選ばれた子供たちが、魔法使いになるための教育を受ける。
　村や街には必ず魔法使いが必要になるため、精霊に選ばれることは名誉なことだった。
そしてソラト学園を卒業し、学園公認の魔法使いになるためには、５人でチームを組まなければならない決まりがある。
　精霊との契約者がたくさん出る集落には、魔法使いのグループが出来る確率も高い。魔法使いの有無は、その集落の繁栄をも左右した。魔法使いたちのいる集落には人が集まりやすく、生活も楽になるので経済が安定するのだ。
　子供たちは大抵、４歳くらいまでに精霊から夢のお告げを受け、契約を結ぶ。
　そうした子供は６歳になるとソラト学園への入学を許されるが、家庭の事情などから、実際に入学するのは１０歳くらいからの場合がほとんどだ。
　編入生が多いが、クラスは年齢別に分けられる。１クラスの人数は多くはないが、１年生から１２年生までいるので、教室は多い。

　空はどんよりとグレイだが、暖かい日だ。そよ風が木の葉を揺らし、遠くで鳥がさえずっている。
　ここは見慣れた場所だった。そして、知っている香り。甘い果物のような香りがして、胸いっぱいに吸い込んだ。
「・・・・・・王、まだお目覚めにならないのですか？」
　美しい彼女が悲しそうにそう言うと、気配が揺れた。その圧倒的な存在感に、世界が揺れたのだ。

　不思議な夢をみた。とても大切な夢を。驚きの感情とともに目覚めた甘露だったが、ベッドか

ら起き上がる頃には、すっかり忘れてしまっていた。
　部屋には誰もいない。甘露は一人きりで起きて、寂しくなった。今まで寮の自室は３人部屋で、いつも誰かがいたのに。
（そうだ、ここは青嵐の部屋なんだ。ソラトに来てから、こんなに静かな朝ってなかったな）
　ソラト学園は魔法使いになるために、素質のある子供たちが全国から集まってくる魔法学園だ。６歳から１７、１８歳くらいまでの子供たちの、ほぼ全員が寮に住んでいた。一部屋に２、３人の相部屋で、兄弟のように育つ。寮はいつも賑やかで、甘露は今まで寂しい思いをしたことがなかった。
　甘露の部屋はツェロ、白玉との３人部屋だが、白玉には双子の白月がいて、彼らはいつも一緒なので昼間は４人いることになる。その白玉が風邪をひいたのは、数日前のこと。白月が夜も一緒にいて看病したいと言いだし、頼まれて甘露は白月と部屋を替わった。一晩だけのつもりだったのに、甘露も熱が出て、白月のベッドに長居することになってしまったのだ。
　白月の部屋は青嵐との二人部屋なので、来客がなければ静かな部屋だ。そして今朝起きてみると、甘露は一人ぼっちだった。
（青嵐は食堂かな？それとも、もう学校に行ったのかしら？）
　甘露はゆっくりとベッドから出た。そろそろ自室に戻りたかった。この部屋に来るときにはすぐ帰るつもりだったので、何も持って来ていない。汗をかいたので着替えたかった。それに彼は、魔法使いのタマゴとして大切なことを怠っていた。
（まさかこんなに寝込むことになるとは思わなかった。そろそろ精霊とのコンタクトをとらないといけないのに）
　甘露は精霊からもらったアイテムを、部屋に忘れてきてしまったのだ。アイテムがなくても、ある程度のコンタクトは取れるはずだ。ところが何度も試すのだが、一向に精霊に届いている感じがしない。心配になってきた甘露は、無性に自室に戻りたくなっていた。
　とはいえ、お世話になった青嵐に何も言わずに出て行くわけにもいかない。
（そうだ、置き手紙をしよう。かみ、紙、適当な紙がないかな）
　紙を探してキョロキョロすると、白月の机の上にお菓子の包み紙が落ちているのを見つけた。一つ拾い皺を伸ばすと、ペンで短く書きつける。
「青嵐へ。いろいろありがとう。一度、部屋に戻ります。またお礼に伺います。甘露」
　甘露はその手紙を青嵐の机の上に置くと、そっと部屋を出た。
　廊下には意外と人がいた。扉を閉めているときは静かだったのに、開けた途端、話し声や笑い声がこだまし、その騒々しさに耳がわんわんしそうだ。甘露は、もしかしたら青嵐が部屋に結界を張っていたのかもしれないと思った。具合の悪い甘露を心配して結界を張っていたのだろうか。
（それとももしかして、青嵐はいつも結界を張っている？）
　ふと、そんな考えがよぎった。青嵐は用心深いところがあるのかもしれない。一見、大らかに見えるが、実は細かい配慮もしているのだろう。それに比べると甘露などは秘密もないし、寮の中で何も心配などしていないので、結界など張ったことがない。甘露からしてみれば、青嵐の用

心深さは少し不思議が気がした。
　そんなことをつらつら考えながら、そっと廊下へ出る。廊下には生徒が行き交っていた。食堂から戻ってくる生徒、これから学校へ行く生徒で、ごったがえしている。甘露は寝間着のままなのが少し恥ずかしかったが、仕方がない。俯き加減で歩いていた。
　自室は近いのだが、体調が優れないと遠く感じた。左右に揺れながら歩いていると、だんだん周りが暗くなっていく。壁を伝い歩きしていたが、意識が遠のいていった。あんなに賑やかだった生徒たちのざわめきが、聞こえなくなっていく。耳にフタをしたように、遠くから聞こえてくるようだった。
（あれ・・・・・・何も見えない）
　最後に見えたのは、驚きに目を丸くする少女、マゼンダ。
　ついには、意識が途切れた。
　一瞬、気を失う。
　気づいたときには、運ばれていた。
（あれ？僕・・・・・・どうしちゃったの？）
　甘露は今、自分がどういういう状況なのか分からなかった。混雑する廊下で皆の注目を浴びていることなど、全く気付いていなかった。
　ベッドに下ろされ、そこが自分の部屋ではないことに気付く。横たわり、落ち付いてきて初めて、そこが青嵐の部屋だと気付いた。また白月のベッドに逆戻りしていたのだ。
「駄目じゃないか。まだ治っていないのに、一人で動いたりして。倒れる寸前！オレが間に合わなかったら、頭を打っているところだったぞ」
　口を少しへの字にする青嵐の顔を見て、自分を運んでくれたのは彼だったのだと分かった。
「ごめんなさい。だって僕、ずっとここにいると迷惑だと思ったし、一度、自分の部屋に戻りたかったんだ。着替えもないし」
　精霊のアイテムのことは言えなかった。少しの間のつもりだったとはいえ、そんな大切な物を持って来なかったことが、少し恥ずかしかったのだ。甘露が申し訳なさそうにしていると、青嵐は、そうかと頷く。
「それは気がつかなくて悪いことをしたな。そうだ、放課後に白月に持ってこさせるよ。元はと言えば、アイツのワガママが原因だからな。勝手に荷物を触っても平気？」
「うん。寝間着を持って来て欲しいな。熱が出て汗をかいたんだ」
「分かった。白月にそう言うよ」
　青嵐は優しい目で頷いた。
「甘露が自室に戻りたい気持ちはよく分かるよ。でも、そうだな。もう一晩、ここにいたら？明日には、きっと良くなっているよ。そんな気がするんだ」
　彼がそう言いながら頬を撫でてくれるので、甘露は顔を赤くした。
「青嵐は、誰にでもそんなに優しいの？」
　甘露は、青嵐の厚意を勘違いしそうだと思った。その瞳は、まるで恋人のように甘く、優しい。ハンサムな彼が愛しい人を見るような目をして微笑むので、つい、目が離せなくなる。

「え？オレは誰にでも優しいわけじゃないよ。そうだな、どうしてだろう？どうして甘露に優しくしたいって思うのかな？」
　青嵐は少し考えるような顔をする。甘露は照れくさくなってきて、顔が火照ってきた。だが返ってきた答えは、少し意外なものだった。
「もしかしたら、精霊のせいかもしれない」
「え？」
　驚く甘露に、青嵐はマジメな顔をする。
「甘露の精霊に、魅かれるのかもしれないな。大切にしなければいけない気にさせるというか。厳かで、仕えたい気持ちだよ」
「つかえる？」
「そう。甘露さま。なんなりとお申しつけください。お姫様ダッコもしてさしあげます」
　青嵐の声が次第に笑いを含んできたので、甘露はからかわれたのだと思った。
「僕をからかったの？おかしなこと言って」
　二人は顔を見合わせて、少し笑う。青嵐が言った。
「いや、茶化して悪かった。でも甘露を大切にしたい気持ちは、本心だよ。それも、ラブだけではないんだ。甘露の精霊は、本当に位が高いのかもしれないな」
「僕にはそんな力は・・・・・・ありません」
　甘露は少し俯いた。入学してからずっと、成績はあまりよろしくない。いや、あまりどころか、ひょっとしたらクラスでも最下位なのではないだろうか。成績イコール精霊のランクではないにしろ、最下位はあり得ない気がした。位の高い精霊なら、青嵐やダイヤのような人につくのではないだろうか。
　考え込んでいると、青嵐にぽんぽんと頭を撫でられた。
「悪いが甘露、オレはそろそろ学校に行くよ。今日は大人しくしていてくれ。後で白月に寄らせるから」
「うん。よろしくお願いします」
　甘露がそう言うと、青嵐はウインクをして出ていった。
　また一人になって、溜息をつく。
（僕、どうしちゃったんだろう。風邪ならそろそろ元気になってもいい頃なのに。こんなにいつまでも体がだるいなんて）
　甘露は、見た目より丈夫なつもりだった。今まで風邪などあまりひいたことがないし、ひいても、すぐに治ってしまう。もしかして、風邪ではないのかもしれない。では、何？そんなことを考えながら、とろとろと浅い眠りにおちる。
　目が覚めると、ベッドの横に双子が座っていた。
「あれ？白月。もうそんな時間？あ、白玉も。元気になったの？」
　甘露は、風邪で寝込んでいるはずの白玉が一緒に来ていることに驚いた。
「うん。起きても大丈夫なくらいには回復したよ。ごめんね、甘露。風邪をうつしちゃったみたいだね」

　白玉が申し訳なさそうな顔をすると、白月が小突いた。
「甘露にうつしたから、早く治ったんだろ。ごめんね、甘露。それで、頼まれた着替えを持ってきたよ」
　そう言って、白月がカバンから服を取り出そうとしている横で、白玉が不思議な質問をする。
「ねえ、甘露。青嵐と何が出来たの？」
「え？」
　甘露は意味が分からず、キョトンとしていた。白玉は、続けて質問する。
「甘露と青嵐が出来たって。何が？」
「は？」
　二人して顔を見合わせていると、白月がベッドの上に寝間着を置きながら、わめいた。
「もうっ！白玉ったら、何を言っているのさ。甘露、今朝、青嵐にお姫様ダッコされたんだって？それを見たマゼンダが大騒ぎさ。甘露と青嵐がデキてるって言うんだ。気にするなよ、甘露。誰も本気にしないさ」
　白月は、少し怒ったような顔をしていた。
　甘露は一瞬、何を言われたのか分からなかった。
「え？な、なに？お姫様ダッコ？マゼンダがなんだって？」
「だ・か・ら、青嵐とつきあってるって」
「マゼンダが？」
「違う、甘露と青嵐が」
　甘露は目を丸くする。
「え？だって、僕は男の子だよ」
　そのセリフを、白月は軽くスルーした。
「知ってるだろ？マゼンダはダイヤのことが好きなんだ。甘露が青嵐と仲良くしている間に、ダイヤを奪い取るつもりなんだ」
「奪う？」
　甘露は二重、三重に驚いた。マゼンダの策略にも驚いたし、自分が青嵐とつきあっていると噂が流れていることにも驚いたし、なにより、白月のマセぶりに驚いた。
　そして、ダイヤのことを思った。
（僕からダイヤを奪う？ダイヤは・・・・・・今まで僕のものだったのかしら？）
　ダイヤは大切な友達だ。でも、甘露のものだったわけではない。マゼンダも白月も、何か思い違いをしているのではないか。
　そして、甘露と青嵐がデキているという噂は、ダイヤの耳にも入っただろう。いつものダイヤなら、驚くか、鼻で笑って終わりだ。でも、今のダイヤは？昨日、甘露と青嵐がキスしていたと勘違いしたばかりではないか。
　甘露は、思わず身震いした。自分の知らないところで、勝手な噂が広がっている。こうして伏せっていては、打ち消すことも出来ない。噂はウソだとダイヤに直接言うことが出来ないことが、一番つらかった。

「ダイヤに会わなきゃ」
　甘露はつぶやいた。彼に会って、青嵐とはなんでもないと、伝えなくてはならない。甘露はそっと体を起こしてみた。よく眠ったお陰か、ずいぶん良くなっている。でもまだ体がだるかった。
「無理しないで、甘露。今は風邪を治すことに専念しないとね」
　双子が口々にそう言いながら、甘露を支える。
　甘露は、その言葉にハッとした。
「それだけど、僕、本当に風邪なのかな？白玉はどんな具合だったの？」
　白玉が口を開きかけたとき、ドアが開いた。
「ただいま」
　話題のカレのご帰還だ。青嵐が部屋に入ってくると、不思議とその場が華やかになる。
「ありがとう、双子ちゃん。頼んだものを持って来てくれたんだね」
　青嵐はベッドの上の着替えをチラリと見て双子をねぎらい、甘露に笑いかける。
「大丈夫？いい子にしてたか？」
　爽やかな笑顔で甘露のオデコに手を当てると、さりげなく熱をみる。それが当たり前みたいな、自然な行動だった。双子は顔を見合わせると、神妙な表情でうなずきあう。
「じゃあ僕たち、そろそろ帰るね。甘露はもう少し寝ていたほうがよさそうだから、ここにいなよ」
　白玉がそう言うと、白月が慌てて言い足す。
「甘露が元気になったら、すぐベッドを返すから」
「うん」
　白月はまだ何か言いたそうな顔をしていたが、結局そのまま部屋を出ていった。
（どうしよう・・・・・・僕）
　甘露は毛布を握りしめた。青嵐の親切はありがたいが、やはり自室に戻りたい。双子の背中を見送ると、途端に寂しくなってきた。
「青嵐、あの・・・・・・」
「甘露、魔力は？」
「え？」
　何と言おうか迷っていたところを、青嵐の意外な言葉に遮られる。
「これはまだ、はっきりしていないんだが。木の精霊持ちのコの力が、弱くなっているみたいなんだ。甘露の魔力はどうだい？」
　青嵐の真剣な顔に、甘露の心臓がドキリとなった。薄々、魔力が弱くなったと感じていたのだ。体調が悪いからだと思っていたが、気になっていた。だから早く自室に戻り、精霊のアイテムを使いたかったのに。
「この前・・・・・・」
　甘露は唇を震わせる。
「この前、青嵐は僕の精霊を見せてくれたよね」

「ああ」
「あのときみたいに、また呼び出してみて下さい。それで、どうしてなのか聞いてみてもらえませんか？」
「甘露」
　青嵐は軽く眉を寄せた。
「実は今朝、甘露が倒れたときに少しやってみたんだよ。甘露の回復を頼もうと思って。でも、応えてくれなかったんだ」
「え・・・・・・」
　甘露は不安になった。それでは風邪をひいているからとか、体調が悪いからとか、そんな理由ではないということか。
（精霊に見放されている？僕から精霊が離れていってるってこと？）
「甘露、落ち付いて。キミだけじゃないんだ。木の精霊のコは皆、個人差があるにせよ、今朝から急に力が弱くなっているんだ。今、先生たちも原因を究明しようとしている。オレもだ。オレの土の精霊は、位が高いうえにフレンドリーだから、原因が分かれば教えてくれると思う。だから心配しないで」
　そっと頬を撫でられ、甘露は自分が泣いていることに気がついた。
「ありがとう、青嵐」
　青嵐に笑いかけられて、甘露はじんわりと嬉しくなってくる。
（青嵐・・・・・・青嵐は優しい。こんなときなのに今、青嵐を信じたいって思ってる。どうしよう、青嵐のことを好きになってしまいそうだ）
　甘露は優しくされて、涙が止まらなくなってしまった。すると、青嵐がそっと抱きしめてくれる。大きな青嵐にすっぽりと抱きしめられ、甘露は安心して力を抜いた。嬉しくて、でも少し恥ずかしい。
　ふとダイヤのことを思い出した。ヤンチャで、大好きなダイヤのことを。こんなとき彼なら、どうしただろう。彼がそばにいてくれないことが、とても悲しかった。

　夕方、青嵐が食堂から運んでくれた食事をとると、体を休める以外、何もすることがなかった。甘露は早く治りたい一心で、すぐに横になる。悩みはいろいろあったが、とにかく元気にならないことには何も出来ない。実際、まだ体がだるくて仕方がなかった。
　青嵐はどこかへ出かけてしまったので、甘露一人でとても静かだ。寂しいときもあったが、だんだんこの状況に慣れてくると、一人が平気になってきた。自分の部屋のようにくつろぎ、まどろむ。ずっと寝てばかりいるので、眠りは浅かった。とろとろと眠り、ふと目が覚める。まだ消灯時間になっていないので、明るいままだ。そんなことを何度か繰り返し、そのうちに本当に眠ってしまった。
　青嵐が帰ってきても、甘露は全く気が付かずに眠っていた。そのうち暗くなり消灯時間を過ぎてから、部屋の扉が開く音で目が覚めた。ちょうど眠りが浅いタイミングだったのだろうか。目が覚めた甘露は、部屋の中が暗くなっていることを不思議に感じた。時間の感覚が曖昧になっている。
（あれ？さっきまで夕方だったのに。どのくらい時間がたったんだろう。今は何時かなあ。あれ？青嵐も帰ってきている。いつの間に？）
　そのうえ誰かが訪ねて来たらしい。青嵐が灯りもつけずに、そっと来客を招き入れた。甘露はまだボンヤリしているし、来客は青嵐に任せることにする。半分眠ったような状態で目をつむったまま、二人がぼそぼそ喋るのを聞くとはなしに、聞いていた。
（何を話しているのかしら？僕が眠っていると思って小さな声で話しているのだろうけど、ヒソヒソ声が逆に気になる）
「セイラン」
　急にハッキリ聞こえて、びっくりする。今まで低く、抑えて喋っていた人が突然、甘く艶を含んだ声で、そうつぶやいたのだ。その色っぽい声に、甘露はドキリとした。
　急に静かになる。
　甘露はその静けさに、物音をたててはいけないと感じた。じっとしていると、甘露はふと、二人が口づけをしているのではないかと気がついた。
（え？もしかして？・・・・・・どうしよう、僕、のぞきをしているの？）
　抱き合う二人の、衣づれの音がする。
「・・・・・・んっ」
　薄暗い部屋に甘い吐息が響き、甘露は眠気がぶっ飛んでしまった。
　ちゅっちゅと合わせるだけだった口づけが、次第に深くなり、探り合うような音がくちゅくちゅと聞こえる。何も見えないだけに、その音ばかりがリアルに分かった。
（え、ええ？相手は誰？）
　甘露は驚きで音を立てそうになるのを、必死でこらえた。
「あ・・・・・・ん」
　色っぽい声を聞いているだけで、おかしな気分になりそうだった。キスの合間に、押し殺した

ような密やかな声をあげる。その声に誘われるように、せわしなく体をまさぐり、激しいキスをする。二人の息が荒くなり、つられるように甘露の心臓がどきどきと鳴った。
（僕は、こんな情熱的な青嵐を知らなかった。彼女をとっかえひっかえしているけど、誰とも友達みたいだったもの）
　甘露は驚き、そして、青嵐をこんなに夢中にさせる人は誰なのかと思った。
　長い接吻のあと、その人は絞り出すように言った。
「不安なんだ」
　まだ息が荒いので、さっきより声が大きい。甘露は不思議に思った。
（え？なんだか男の人みたいな声だな）
　青嵐はまだ離れがたいのか、その人を抱きしめながら言う。
「やっぱり、いつもと違うか？」
「ああ。精霊が落ち着かないんだ。それにつられて、こっちまで不安になる」
「木の精霊が弱くなったことで、バランスが悪くなったんだ。他の精霊に影響が出ないといいと思っていたのだが。すでに影響を受け始めているのか。・・・・・・ちょっと早くないか？やけに敏感だな。いや、ビンカンなのは嬉しいが」
　バシッと叩く音がする。
（？？？）
　木の精霊の話だったので、甘露もつい聞き耳をたてていたが、会話の流れについていけず、頭の中がクエスチョンマークでいっぱいになる。
「イテテ。木の精霊持ちの力が弱くなっている。一人だけじゃなくて、全員なのだとしたら、厄介だな」
　青嵐はそこで溜息をついた。そして厳かに言い放つ。
「木の精霊王に何かあったんだ」
「まさか」
　鋭い声。甘露もハッとして、身じろぎしそうになった。
（木の精霊王？考えたこともなかった。そんな遠い存在のものに、こんな影響を受けるものなのだろうか？・・・・・・なんだかピンとこないや）
　甘露も授業で、精霊王について習ったことがある。それぞれの精霊、火・土・水・風・木の頂点に立つ、五人の精霊王がいると。だが実際には見たこともなければ、感じることもない。話に聞くだけの、全く未知の存在だった。
「まさかそんなことが・・・・・・伝説の精霊王か。青嵐はそんなものが本当に存在していると思っているの？」
「え？それこそまさか、だな。まさかヒイラギは、精霊王の存在を信じていないのか？」
　青嵐の声は穏やかだったが、甘露は爆弾を落とされたように驚いた。
（え、い、今、何て言った？ヒイラギって言わなかった？ヒイラギって・・・・・・あのヒイラギさん？）
　話の内容ではなく、甘露が驚いたのはそこだった。うっかり声をあげそうになったほどだ。今

すぐハネ起きて、確かめたい衝動にかられる。さっきまで青嵐と熱いキスを交わしていた相手が、ヒイラギだというのか？あのいつも沈着冷静で、慇懃無礼なヒイラギ？冷たい視線で相手を射抜く、アイス・ドールと言われているヒイラギ？
（そういえば、この間もこんなことがあったような・・・・・・あれは、そうだ、ダイヤの部屋で、寝起きのヒイラギさんが色っぽいと思ったんだ。ヒイラギさんは、色気を隠しているの？）
　それからの甘露は、ヒイラギのことで頭がいっぱいになり、二人の話を聞いていなかった。もっとも、話といっても、ヒイラギが心細さを訴えるのに、青嵐がキスで慰めるという、内容のないものだったが。ようするに、イチャついていたのだ。
（青嵐はあんなにたくさん彼女がいるのに、男の人も好きなんだ。青嵐は、男の人も愛せる人だったのか。僕だって、青嵐のことが好きなのに・・・・・・）
　甘露は、ふとそんなことを考えて顔を赤くする。
（ぼ、僕は何てことを！そりゃあ、青嵐はステキだけど）
　男の人なのに、という考えで自分の気持ちに気付かないフリをしていた。でもこの二人は、そんなことは考えなかったようだ。
　甘露があれこれと自分の考えに浸っているうちに、二人の話は終わったようだ。ヒイラギが帰るそぶりをみせる。
「急に来て、悪かった。一人じゃないことは知っていたのだが。ところで、この部屋のコが熱を出したと思っていたのだが、どうして甘露が寝ているんだ？」
　ヒイラギの口から自分の名前が出て、甘露はドキリとする。
「いや元々、白玉が熱を出して、白月と甘露が入れ替わったんだ」
「ん？よく分からないが、まあいい。オレは帰る」
　ヒイラギのそっけない口ぶりに、青嵐が揶揄を含んだ声で言う。
「もしかして、それを確かめに来たの？ダイヤにでも頼まれた？」
「まさか。お前に会いに来たんだ」
　ヒイラギがそんなことを言うので、お別れのキスが長くなった。甘露は自分に関係のある話かと思って熱心に聞いていたので、またアテられるハメになる。二人で散々別れを惜しんでから、やっとヒイラギは帰っていった。
　甘露は興奮が冷めず、ずっとドキドキしながら寝たフリを続けていた。恋人を見送った青嵐が静かに扉を閉め、ゆっくりとベッドに近付いてくる。
（寝たふり、寝たふり。平常心、平常心）
　甘露は心の中で、呪文のように唱えながら息を殺す。
「起きているんだろ？甘露」
　気付かれていたことに驚き、甘露はビクリと動いてしまった。
（し、しまったあ）
　焦る甘露に、青嵐は怒るでもなく、のんびりと声をかける。
「ごめんよ、まさかここに来るとは思っていなかったんだ。甘露に熟睡の呪文でもかけておけば

良かったな。オレもいろいろ余裕がなかった」
　聞きようによっては赤面もののセリフを言いながら、青嵐が甘露の寝ているベッドに腰掛ける。彼が普通に話しかけてくるので、甘露はついに、跳ね起きた。
　興奮して、顔が赤い。体調不良が吹き飛んでしまったみたいだ。健康優良児のように目を輝かせる甘露の様子に、青嵐は驚いて一瞬、目を丸くしたが、すぐにクスクスと笑いだした。
（こ、この人はあああ！！）
　甘露は言いようのない気持になる。こんなに自分がオロオロしているのに、青嵐のこの余裕はなんだろう。
「ちゃんと説明してください」
　甘露がスネたように言うと、青嵐はニコリと微笑んだ。
「何を？精霊王のこと？」
「それもですけど、ヒイラギさんのことです」
　まったく、精霊王のことなどブッ飛んでいた。甘露にとっては、木の精霊にかかわる大切なことなのに、今、青嵐に言われるまで忘れていた。
（あれ？考えてみたら僕、青嵐の恋人でもなんでもないのに、ヒイラギさんのことで青嵐を責めることなかったな）
　甘露は少しバツが悪くなって下を向いたが、青嵐はそうは思わなかったようだ。
「ヒイラギのことは、大切に思っているんだ」
　誠実な声がして、思わず顔をあげる。
「でも青嵐には、カノジョがたくさんいるよね？その人たちは？それにヒイラギさんは男だよ？青嵐は男の人も好きなの？もしかしてカレシもたくさんいるの？いったい、誰が恋人なの？」
　甘露は矢継ぎ早に質問した。その屈託のない、子供の特権のような質問攻めに、青嵐は苦笑する。
「いや、耳が痛い。困ってしまうな」
　そう言って、しばらく黙っていた。甘露も黙って青嵐を見つめる。薄闇に静寂が広がった。夜は人を素直にさせる。
「たぶん・・・・・・オレはヒイラギのことを愛しているのだと思う。でもオレは、自分で言うのもナンだが、寂しがりやなんだ。ずっと誰かに、そばにいて欲しいんだよ。・・・・・・ヒイラギは、そばにいてくれないんだ」
　そんな告白を聞いて、甘露はしばらく何も言えなかった。どう答えていいかも分からなかった。いつも余裕たっぷりな青嵐が、一人でいることも出来ない寂しがりやだなんて、すぐには信じられない。
（青嵐が寂しがり？あんなにモテモテなのに？寂しいからモテるの？違うな・・・・・・モテるけど寂しい？そんなものなのかなあ？僕にはカノジョがいないから分からないや。それでヒイラギさんのことは？なに？なんだったっけ？）
「僕には、よく分かりません」
　甘露が素直にそう言うと、青嵐は少し悲しそうに微笑んだ。

「そうか。いいんだ。まあ、そういう人間もいるってことさ」
　青嵐の開き直りぶりに甘露が戸惑っていると、青嵐が、あっ、という声をあげる。
「このこと、ヒイラギにはナイショにしてくれよ」
「え？」
「ヒイラギは、オレとつきあってることを秘密にしているんだ」
「は？」
「甘露がここにいると知っていたから、来るのを控えていたみたいなんだけど、今夜はガマン出来なかったみたいだな。さっきは甘露が寝ていると思っていたんだぜ。だからあんなに大胆だったんだ。まあそれで、甘露には迷惑かけたわけだけど。・・・・・・甘露に知られたって分かったら、ヒイラギ、舌噛んで死ぬかも」
「え、ええっ？」
　甘露が目を白黒させると、やっと青嵐はハハハと笑った。

　翌日、ようやく甘露は自室に戻ることが出来た。熱は下がっていたし、それどころか昨日までの辛さが嘘のようにスッキリしている。久しぶりで気持ちの良い朝だ。
　そんな甘露を見て、青嵐はもちろん喜んでくれ、自分の看病のおかげだとまで言った。甘露は心の中で、ショック療法だったんじゃないかと思ったが、青嵐が心をこめて看病をしてくれたことも事実なので、そこはお礼を言っておく。
「じゃあ僕、戻ります。いろいろありがとうございました」
「うん。また遊びに来てくれよ」
　甘露は着替えを入れた小さなカバンを持って、いそいそと懐かしの部屋に帰った。

「ただいま」
　甘露がドアをそろりと開けると、ツェロと双子がいた。
「あっ！甘露。元気になったの？」
　双子が声を揃えて言う。甘露は照れたように笑った。
「うん。ご心配おかけしました」
　ツェロが近寄って来て、甘露の荷物を持つ。
「寝ていなくても大丈夫？もう少しベッドで横になっていたら？甘露のベッドはシーツを換えておいたし、すぐ休めるよ」
　ツェロの親切に、甘露は感動する。
（僕にはお兄さんがたくさんいるみたいだ）
「ありがとう、ツェロ。でも大丈夫です。昨日はものすごくダルかったのに、今日はウソみたい

に元気なんだ。急に元気になったみたい」
　甘露は本当に気分が良くて、ニコニコとした。ただ、あまり食べずにずっと寝てばかりだったので、少しエネルギー不足だ。ちょこんとベッドに腰掛ける。
　ツェロが、人のよい笑顔を向けた。
「今日は学校が休みで良かったな。しっかり治して体力を戻して、授業の準備をしておくといいよ」
「うん。学校かあ、久しぶりだなあ。何をやっていたか忘れてしまったよ」
　それは本心で、甘露は授業のことをすっかり忘れていた。魔法学園という性質上、それぞれの能力、魔力にあった教え方をしているので、あまり不都合はないのだが、一般教養の授業が遅れるのは困る。魔法使いとはいえ、卒業すれば社会に出て人々の依頼を受けることになるのだから、あまり世間知らずというわけにはいかないので、魔法の勉強だけではなく一般教養の授業もあるのだ。甘露が少し憂鬱になっていると、双子がそれぞれアドバイスする。
「ダイヤに聞きに行ったら？どこまで授業が進んでいるか、教えてもらうといいよ」
「そうだよ甘露、ダイヤが心配していたよ。・・・・・・いろいろと」
　白月の意味深なセリフに、甘露は苦笑する。
（何が言いたいのかなあ？この子は何か、誤解をしているのじゃないかしら？）
　反論しようと思ったが、実際、ダイヤにも会いたかった。そういえば、ずっと会っていない気がする。ふと、誤解されたままだったことを思い出し、急に不安になってきた。
（今までダイヤのことを忘れていたなんて、どうかしていた。白月の言うことも一理あるのか・・・・・・白月ったら。どこまで分かって言ってるのかな？）
　結局甘露は、すぐにダイヤに会いに行くことにした。三人に見送られて廊下へ出てから、いろいろなことを思い出す。甘露は青嵐とキスをしていたと、ダイヤに勘違いされたままだった。まずそこから説明しなくてはならない。
（青嵐がふざけて、勘違いさせたままにしとこうって言ったんだ。あのとき、すぐに誤解をといておけばよかった。寝込んでいたから出来なかったんだけど、本当に嫌だったら、なんとか出来たはずなんだ。双子に頼むとか）
　甘露はそんなことを考えた。どうしてそうしなかったのか。
（ひょっとして僕は、あのときから青嵐のことを好きだったのかもしれないな。そのことに気付く前に、失恋しちゃったけど）
　甘露の胸に、いろいろな思いが渦巻く。青嵐の爽やかな笑顔を思い出すだけで、胸がきゅんとした。弟みたいだと、看病したいのだと言ってくれた青嵐。あのとき、彼は甘露のものだった。でも弟は弟でしかなかったのだ。彼は弟にも優しかったけれど、それ以上に恋人には情熱的だった。まるで扱いが違ったのだ。激しいキスを連想させる音や荒い吐息を聞かされて、甘露は顔が真っ赤になったことを思いだす。
（どうしよう。ヒイラギさんってダイヤの同室じゃないか。顔に出ないようにしないと）
　青嵐から、ヒイラギとのことを内緒にしてくれと頼まれたのだ。しかも甘露が二人の秘密を知っていることを、ヒイラギ本人にも内緒にしなければならない。甘露はダイヤの部屋の前まで

来て、入るかどうか迷った。入るにしても、心の準備がいる。ウロウロしていると、急にドアが開いた。出てきたのはモミジだ。
「あ」
　甘露は驚いて、ビクッと飛び上がる。まだどんな顔をすればいいのか、何から話せばいいのか、心の準備も何も出来ていなかった。
　だがそんなこととは知らないモミジは、甘露を見ると振り返って叫ぶ。
「ダイヤ、お客さん」
　それだけ言うと、そのまま部屋を出ていった。
「あ・・・・・・。えっと」
　甘露は仕方なく、ダイヤの部屋に入る。ダイヤはベッドに座り、手を開いたり閉じたりしていたが、甘露を見ると、ぱっと顔を輝かせた。
「甘露！元気になったのか？」
　途端に空気が変わった。暖かい太陽の匂いが、甘露を包み込む。ダイヤの瞳は青空のようにキラリとして美しく、甘露の好きな顔だ。甘露は少し安心して、微笑みを浮かべた。しかし部屋のすみで本を読んでいるヒイラギに気付くと、その笑顔もぎこちないものになる。甘露はなんとか平常心を保とうと頑張った。
「うん、急に元気になったんだ。昨日までは苦しかったんだけど、今日は嘘みたいに元気になったんだよ」
「ふうん。ま、ここに来いよ」
　ダイヤが隣りに座るようにと、ベッドの上をぽんぽんと叩く。甘露は緊張して、右手と右足が一緒に出た。ぎこちない歩きを見て、ダイヤがいぶかる。
「本当に元気になったのか？まだ調子が悪いみたいだけど」
「元気だよ。今はちょっと緊張して・・・・・・いや、元気、元気」
　甘露はダイヤの横にちょこんと座ると、何から話そうかと考えた。青嵐とのことを話すつもりだったが、部屋にはヒイラギもいる。困っていると、ダイヤの方から話しかけてきた。
「やっぱり風邪だったのか？先生には診てもらった？」
「いや、ずっと寝ていたんだ。白玉に風邪をもらったと思っていたから、ただ寝ていればいいと思っていたんだけど、本当に風邪だったのかなあ？急に悪くなったり、突然治ったり、ちょっと変だった」
　甘露がそう言うと、ダイヤは腕組みをする。
「そういうときは、ジャスパー先生のところに行けば良かったのに。先生なら原因を教えてくれるよ。先生はカードで、原因と現状と結果を占うんだ。全ての因果関係が未来を創るという研究をされているのさ。オレは甘露に、そう教えたかったんだけど・・・・・・」
　ダイヤはそこまで言って、すっぱいものでも口にしたような顔をした。彼は、青嵐の部屋で見たことを思い出したのだ。甘露はそのことに気付き、慌てた。
「違うんだ、ダイヤ。勘違いだよ。僕と青嵐はなんでもないんだ。兄弟みたいなものさ」
　そう叫んで、ひやりとする。青嵐の名前を出してしまった。そろりとヒイラギを盗み見る。彼

は知らん顔で読書を続けていた。
「なんのことだよ？兄弟でも、キスくらいするってことか？青嵐は誰とでもキスするもんな」
　ダイヤの爆弾発言に、甘露は目を見開いた。知らないとはいえ、ヒイラギの前でなんてことを言うのだろう。
「し、しないよ！してないよ！だから勘違いだって言ってるだろ。青嵐は誰ともキスしない、じゃなくて、誰とでもキスするわけではないよ。本当に好きな人とだけだよ」
「へ？なんだよ・・・・・・やけに生々しい弁解だなあ。ま、オレは青嵐のことなんかどうだっていいけどな」
　ダイヤは冷たく言って俯き、自分の手元を見た。気まずい雰囲気だ。甘露はなんとかして誤解をとき、元のダイヤに戻って欲しいと願った。
「ダイヤは誤解しているよ。どうしてそんなに青嵐を目の敵にしているの？彼はいい人だよ。お姉さんばかりだから、弟が欲しかったんだって。それで僕に優しかったんだ」
「それで甘露が弟になったわけ？それにしちゃあ、やけに仲良しだったじゃないか。デキてるとか噂になってたぞ。だからオレのことを、目の敵とか言うんだな」
　甘露は絶句し、激昂した。どうしてダイヤは、こんなに分からずやなんだろう。
「違うよ！目の敵にしているのは、ダイヤの方だろ？青嵐の方は何とも思っていないのに。いや、そうじゃなくて、青嵐には恋人がたくさん、じゃなくて・・・・・・カノジョがたくさんいる・・・・・・それも変か。えっと、友達がたくさんいるだろ？噂なんか信じるなよ！それにヘンだよ、ダイヤ。僕は女の子とつきあうんだ。男の人とつきあったりしないよ」
　言ってから、しまったと思った。これではまるで、青嵐にとってダイヤなんか眼中にないみたいではないか。それにヒイラギのことを隠すつもりだったが、彼を否定したような気がした。言ってしまった言葉は戻らない。甘露は弁解したかったが、言葉がみつからずに沈黙する。
　ダイヤは顔を歪めた。怒りなのか、悲しみなのか。そしてうつむき、もう甘露の方を向いてはくれなかった。押し殺すような声で言う。
「なんだよソレ。甘露、もう帰れよ」
　甘露は、自分が失敗したと分かった。
「え？」
「これから用事があるんだ。それにお前だって、まだ寝ていた方がいいんじゃないか？」
「そうじゃなくてダイヤ・・・・・・ごめんね、ダイヤ・・・・・・こっちを見て」
　ダイヤは顔をあげてくれない。甘露は悲しくなり、途方に暮れた。でももう、どうしようもない。のろのろと部屋を出て行くと、ヒイラギがちらりと甘露を見た。謎めいた顔。彼は何を思っているのだろう。
　甘露は来たときとまるで違う気分で、ダイヤの部屋を後にした。話せば話すほど、ダイヤの心が自分から離れていくのを感じた。何をどう言えば良かったのか。もっと上手く話せなかったのだろうか。甘露は自分を責めながら自室に戻った。
　そこには相変わらず双子がいて、仲良く並んで座っている。彼らは喧嘩をしないのだろうか。仲良しの秘訣でもあるのだろうか。

「おかえり、甘露。早かったね。ダイヤには会えた？」
　白玉がそう言えば、白月も聞いてくる。
「ちゃんと授業内容を聞けた？」
「あ？ああ・・・・・・うん」
「あれ？元気ないね」
　双子がユニゾンで言って、顔を見合わせる。
「ダイヤは用事があるって。何も聞けなかったんだ」
　甘露は悲しくて何も話したくなかった。まだ気持ちの整理もつかず、説明が難しい。どっと疲れた気がして、ベッドに横になった。
「大丈夫？」
「大丈夫・・・・・・じゃないかも」
　甘露は気が滅入っていた。体は元気になったのに、今度は心がダメになった。もう、どうしたらいいのか分からない。甘露の様子に、白月は察したらしい。
「ダイヤと喧嘩したの？謝ったら許してくれるよ。ダイヤ優しいもの」
「うん、そうだね。でも・・・・・・許す？」
　どう言ったら分かってくれるのだろう。何を言っても無駄な気がした。そもそも、どうしてダイヤがあんなに頑ななのか分からない。何が悪かったのか。彼は一体、何が気に入らないのだろう。それにヒイラギだって、冷たいではないか。同じ部屋にいたのに助けてくれなかった。
　甘露は最初は自分を責めていたが、冷静になってくるとダイヤとヒイラギに対する理不尽な怒りがこみあげてきた。
（僕はヒイラギさんの秘密を黙っていてあげたのに。ヒイラギさんは僕に意地悪だ。ダイヤだって、勝手に勘違いして僕のことを信じようともしない。ひどいよ。それに、たとえ僕が本当に青嵐とキスしてたって、そんなのいいじゃないか。ヒイラギさんならともかく、なんでダイヤが怒るんだよ）
　甘露はむしゃくしゃしてきた。がばりと跳ね起きる。
「僕は悪くないぞ！ダイヤなんて、知るもんか！許してなんて、もらわなくていい。僕は悪くないんだからな」
　双子は甘露の変貌ぶりに驚いて、目をぱちくりした。甘露は苦労して笑ってみせる。
「大丈夫。僕は大丈夫だよ。ダイヤがいなくても平気さ。ほら、二人ともそんな顔しないでよ。ね？」
　双子は顔を見合わせる。白玉がおずおずと言った。
「そうなの？甘露はいつもダイヤと一緒だったのに。仲直りした方がいいんじゃないの？」
「いいんだ。僕は一人だって平気だよ。大人になるんだ」
　強がって胸を反らす甘露に、白月が心配する。
「何があったか知らないけど、気をつけた方がいいよ。ダイヤはモテるから、狙ってるコがたくさんいるからね」
「何を言っているのか分からないよ、白月。僕が何を気をつけるのさ。僕よりダイヤの方がモ

テるってこと？カノジョを取られるって心配してくれてるの？僕にはカノジョなんていないよ？」
　甘露の言葉に、白月は戸惑いの顔を見せる。
「甘露がそれでいいなら、いいんだけど」
　甘露は大きくうなずいた。それで話は終わりとばかりに、ことさら元気な声を出す。
「さあ、僕は学校の準備をするよ。明日は一般教養の授業があるんだ」
　甘露が教科書を開くと、双子はあれこれ言うことを止めた。そしていつものように、二人でヒソヒソ喋ったり、突き合ったりして遊んでいた。

　午後になってから、ツェロが戻ってきた。彼は最近外出することが多いので、ツェロより白月の方が、この部屋にいる時間が長いのではと思うほどだ。今日は早い時間にふらりと戻ってきて、甘露に屈託のない笑顔を見せる。
「甘露。戻っていたのか」
「うん」
　甘露は、ツェロにもダイヤのことについて聞かれるのかと憂鬱になる。だがツェロは、そのことについては一切言わなかった。
「ジャスパー先生が甘露に会いたがっているんだ。もし具合が悪くなければ、一緒に行こう」
「ジャスパー先生？」
　その名前は、今朝ダイヤの口から聞いたばかりだ。
（先生が僕に何の用事かしら？ダイヤは先生に占ってもらえって言っていたけど、そのことで呼ばれたの？でも具合が良くなってから呼ばれるのもヘンだし、僕の方から頼むならともかく、先生の方から声をかけられるなんて、不思議だな）
　甘露には理由が分からなかったので、戸惑いながら答える。
「いいけど・・・・・・」
「よし。じゃあ今から行こう」
　明るく言うツェロに、甘露は仕方なくついて行った。

　休みの日のソラト学園は、とても静かだった。授業は休みでもいくつかのサークルは活動しているということだが、甘露は興味がなかったので詳しくは知らない。サークルは表立って活躍するわけでもなく、勧誘活動などもほとんどしていないからだ。学生らしいクラブ活動というよりは、むしろ秘密結社のノリだった。今日もどこかの部屋で、サークル活動が行われているのだろうが、辺りに人の気配はない。広い校舎の、どこか違う場所にあるのだろうか。
　甘露の緊張をよそにツェロはのんびりと廊下を歩いていき、階段を上がって三階の部屋をノックする。
「おはいり」
　男性の硬い声がした。二人が部屋に入ると、年齢不詳の男が待っていた。
「君が甘露？初めて会うな。私がジャスパーだ」
「９年生の甘露です。はじめまして」
　甘露が挨拶すると、ジャスパーは優しく微笑んだ。
「調子が良くないところを呼び出して悪かったね。さあ、二人とも座って」
　ジャスパーは中央の丸いテーブルに着くよう勧め、自分も座った。狭い部屋は雑然としており、壁に沿ってぐるりと本棚が囲んでいる。そこにはたくさんの古い本と、甘露には理解できない

不思議なものがゴチャゴチャと詰め込まれていた。
　甘露は向いに座るジャスパーを、まじまじと見つめた。鼻筋の通った美しい顔をしているが、金髪は銀に近い薄い色で老けて見える。肌はつるりとしているが張りがなく、若くはなさそうだ。彼はまるで、年をとることを押しとどめているように神秘的な存在だった。そして目を閉じたり開いたり、上を見たりどこか遠いところを見たりしているので、甘露が呆気にとられていると、突然こちらを凝視したりするので、ぎょっとした。ジャスパーはしばらくそんなことを繰り返していたが、ようやく口を開いた。
「君も知っていると思うが、ここ数日、木の精霊持ちが急に魔力を減退させる事態が起きている。昨日から特にひどい。君は大丈夫かな？」
　甘露はドキッとした。
「あっ。ここ数日寝込んでいたので、いつからだったのか分からないのですが、僕も魔力を感じることが出来なくなっています。僕は体調が悪かったので、そのせいかと思っていました」
「ふむ」
　ジャスパーはためらいがちに、甘露に告げる。
「実は甘露、私の占いでは今回の件、君が関係していると出ているのだよ。たぶん体調不良もそのせいだ」
「ええ？」
　甘露は驚いて声が裏返る。まさかそんなことがあるとは思っていなかった。言葉も出ない甘露に代わり、ツェロが質問する。
「関係って、どういうことです？」
「それがハッキリとは出ないのだ。分かっていることは・・・・・・」
　ジャスパーはそう言って、何もない宙でサッと手を振った。するとたくさんのカードが現れ、円卓の上に散らばった。
「これらのカードを読み解くと、ここより東南の方角から来た者、木の精霊、年若い男性、魔力の強い者。つまり、甘露を示している」
　甘露は慌てて訂正する。
「先生、人違いですよ。僕は魔力が強くはありません。情けない話ですけど・・・・・・クラスではいつもビリです」
　そう叫んで、顔を真っ赤にした。ジャスパーが甘露をなだめるように微笑む。
「いや、君は魔力が強い。まだ誰も気が付いていないだけだ。なぜなら、君自身が気付いていないからね。君には大きな力が眠っている。ただ、力の発露の方法が分かっていないだけだ」
　甘露は意味が飲み込めず、きょとんとしていた。突然そんなことを言われても、まるで実感がない。
（先生は僕をなぐさめるためにそんなことを言っているのかしら？そりゃあ僕たちは魔法使いのタマゴなんだし、誰だって一応、魔力はあるのだから）
　考え込む顔したツェロが、疑問を口にする。
「先生、それで甘露はどうすればいいのでしょうか。今回の件に関係していると分かっても、そ

れがどういうことなのか、どうすれば解決できるのか分かりません」
「そうなのだ。それが問題なのだが」
　ジャスパーはまたサッと手を振る。カードが裏返り、模様になった。その模様は不思議な幾何学模様や渦に変化し、いつまでも定まらずにいた。
「やはり駄目か。肝心なことを占おうとすると、こうなのだ。甘露本人を前にしたら答えが出るかと期待したのだが」
　ジャスパーがもう一度手を振ると、カードが消えた。消える寸前、かすかに花の香りがする。
「まだ原因が分からないうちは、公にするつもりはない。甘露が関係していることは、三人の秘密にしよう」
　ジャスパーが重々しく言う。
「いいね、甘露。ツェロも。誰にも話さないように。それから甘露、何か分かったことがあったら教えてくれ。いつでも来てくれて構わないし、ツェロに伝言してくれてもいい。彼はしょっちゅうここに来ているからね」
「え？ツェロが？」
　甘露は同室のツェロがここに来ていたことを知らなかったので、少し驚いてツェロを見た。ツェロがにこりとしながらうなずく。
「分かりました先生。ツェロに相談します」
「うむ」
　ジャスパーはうなずくと沈黙し、また宙を見るような目つきになった。その様子を見たツェロが、甘露を促す。
「甘露、先生は占いに入られた。僕たちはこのまま帰ろう」
「え？退室のご挨拶をしてないけど」
「いいんだ。長いかもしれないから」
　ツェロは心得ているようだった。そして二人で部屋を出る。
　ツェロと並んで廊下を歩きながら、甘露はジャスパーの言っていた意味について考えた。
「ねえ、ツェロ。さっきの話、どう思った？本当のことかしら？」
「そうだね、唐突だったし、具体的なことは何も分からなかったし。甘露が今回のことに関係があるとしか言われなかったから、信じることは難しいよね。でも」
「でも？」
「ジャスパー先生の占いはよく当たるんだ」
　ツェロの言葉に、甘露は暫し黙り込む。甘露は今まで、クラスでも大人しくて目立たない存在だった。貧しい田舎から出てきた子。それが甘露への評価だ。そんな風に、全く注目されていなかったのに、急に渦中に放り込まれても戸惑ってしまう。解決するもなにも、自分のことだという実感すらないのだ。よく当たる占いと言われても、今回のことはジャスパーが人違いをしているとしか思えない。
「やっぱり僕、ピンとこないや。どうしたらいいのかも分からないし。・・・・・・ねえ、今回の件って、木の精霊持ちの人たち、皆に影響が出ているのかな？うちの生徒だけ？ひょっとして

先生たちも？」
　甘露がふと気が付いた疑問を口にすると、ツェロは深刻な声で答えた。
「そうさ。それどころか学校だけの問題じゃないよ。街の魔法使いたちもだって話だ」
「えっ！そんなに大きな問題だったの？それが僕と関係があるだなんて、一体どうすればいいの！」
「しっ！甘露、声が大きい」
　ツェロの注意に、甘露はハッとして口をつぐむ。驚きのあまり大声で叫んでしまった。興奮していて、自分が大きな声で喋っていることに気付かなかったのだ。甘露が黙ると、辺りはシンと静まり返っている。
（誰もいないのに、ツェロは大袈裟だなあ）
　甘露はのんびりとそんなことを考えたが、年長であるツェロに従っておく。ツェロは周りを見回し、声をひそめた。
「こんなところで話す内容じゃなかったな。部屋に帰ってから、結界を張って話そう」
「うん」
「失敗だったな。手遅れになっていなければいいけど」
　ツェロは心配そうにつぶやいたが、そう言われても甘露にはピンときていなかった。
（結界かあ。結界と言えば青嵐。青嵐の秘密・・・・・・今思えば、青嵐が結界を張っていたのって、ヒイラギとのことを隠すためだったのかなあ）
　などと呑気なことを考えていたので、周りが不気味なほど静かであることに、全く気が付いていなかった。
　二人の足音が静かな廊下に響く。世界が息をひそめているようであった。

　そんなこともあって、甘露には考えることがたくさんあった。だから小さな出来事に構っていられなかった。でも自分にとっては大したことではないと思っていたら、それが他人にとっては重大なことだったりすることもある。大したことではないと放っておいたら、知らないうちにどんどん悪い方へいってしまうのだ。
　ほんのささいな誤解だったのに、いつしか分かってもらえると訂正しないでいたら、そのまま誤解が誤解を呼んでしまう・・・・・・今の甘露が、そんな状態だった。精霊の問題もそうだし、ダイヤとの仲もそうだ。
　甘露にとって、ダイヤは大切な友達だ。今までだって何度か喧嘩をしたし、いつもすぐに仲直りしていた。だから今回だって、ちょっとヘソを曲げたダイヤがすぐに機嫌を直し、仲直り出来ると思っていたのだ。
　翌日、甘露はダイヤに話しかけてみたけれど、冷たい目でにらまれただけだった。仕方なく、甘露はしばらく放っておくことにした。何を言っても聞いてもらえないのだから、少し時間を置いた方がいいと思ったのだ。そのうちにダイヤも頭が冷えるだろう。そうなってから話しかけれ

ばいいのだ。そう思って甘露は一人で教室に入り、黙って教科書を開いたが、ダイヤと話せないことは思っていたよりツライことだった。
　甘露はずっとダイヤと一緒だったから、他に友達がいないことに気が付いた。人見知りするので、自分から積極的に友達を作ろうとしてこなかったのだ。話しかけるのにも勇気がいった。ダイヤのときは、彼の方から話しかけてきたのだ。二人は気が合ったし、いつもダイヤが甘露を構うので、ずっとくっついていた。だから甘露は今まで、他に友達を作る必要もなかったし、話しかけようとも思わなかった。
　一方、ダイヤは明るい性格で、誰からも好かれている。彼は人見知りなんてしないので、知らない人にもすぐに笑いかけることが出来た。今だって、ダイヤは一人ではない。甘露がこっそりダイヤの方を見ると、彼はふわふわした髪の女の子とお喋りしていた。
（ダイヤはモテモテだな。　僕がいなくても、友達がたくさんいる。・・・・・・もしかしてこれを機に、カノジョを作っちゃうかもしれないな）
　ふとそんなことに気付き、甘露は寂しくなった。胸がズキリと痛くなる。今まで隣りにダイヤがいることが当たり前だったから、彼を失うことなど考えたこともなかった。甘露はチラチラとダイヤを見たが、ダイヤの方は一度も甘露を見ることはなかった。
　最初の授業はアダージオ先生で、先生は定刻通りに来た。
　アダージオの授業は人気がある。自分に力を与えてくれている精霊の得意分野を見つけ出し、その力を借りることによって、どのような活用方法があるのかを考える、実用的な授業だ。生徒たちは卒業した後、魔法使いとして生計を立てていくつもりなので、街の人たちに必要とされる魔法を身につけなければならない。赤ん坊の熱を下げたり、恋に悩む者たちのために占ったり、農家のために雨雲を呼んだりすることだ。
　精霊にも得手不得手がある。簡単に言えば、火の精霊が雨を降らせることは難しいが、水の精霊や風の精霊には易しいということだ。そして水や風の精霊の中でも、どのように目的を達するかは扱う人間によって違ったりもする。雨雲を作るところから始める者もいれば、遠くから雨雲をかき集めてきて雨を降らせる者もいる、といった具合に。
　アダージオは色白でぽっちゃりとした初老の男性で、丸顔に小さな目が印象的だ。土の精霊を持つ彼は、人が良く生徒から慕われている。アダージオは教団に立つと、えへんえへんと咳ばらいをした。
「えー。今日は臭覚が良い人について話そうと思う。あまり魔法とは関係がないと思われがちだが、実は・・・・・・」
「先生」
　アダージオの話を遮って、手を挙げた者がいる。東雲だった。彼女は黒髪が自慢の美人で、土の精霊持ちだ。いつも数人の女の子とグループを作っているので、甘露は一度も話をしたことがなかった。
「先生、申し訳ありませんが、今日は別の話をして下さいませんか？」
　教室がざわつく。東雲の突然の申し出に、アダージオも驚いたようだ。
「どうしたのかね？急に。積極的なことは良いことだが、私にも教える順番というものがある」

「すみません、先生。でもどうしても、気になることがあるのです。精霊の力のことです。私たちは精霊の力が弱くなっては、魔法を使うことが出来ません。そうなっても、魔法で生計を立てていくことが出来ますか？」
　ヒソヒソ喋る声が増える。アダージオはまた何度も咳ばらいをした。
「静かに、静かに。確かに、一時的に精霊の力が弱くなることはある。波があるのだ。でも一度精霊と心を通わせたら、彼らが去っていくことなどない。余程のことでもない限りな。魔力が無くなることなど有り得ないのだから、安心していていい」
「それならいいのですけど、なぜ今、木の精霊持ちの人だけが弱くなっているのですか？先生たちは理由を隠してらっしゃるのでは？理由が分かっているなら、対策を練った方がいいんじゃないですか？」
　東雲は冷静だった。彼女は土の精霊持ちなのだから、今魔力が使えなくて困っているわけではない。それなのにこうして意見するのは、彼女の正義感なのか、木の精霊持ちの友人たちに対する思いやりなのか。引き下がることなく、静かな声でアダージオを追い詰める。彼は困っていた。
「そんなに心配しなくても大丈夫だ。まだ木だけで、全ての精霊が弱くなったわけではない。必ず力は戻る」
「では、木の精霊が弱くなったことは認めるのですね？なぜ今のうちになんとかしないのです？甘露が原因なのでしょう？」
　教室は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。突然名前を出された甘露は、びっくりして声も出ない。皆が甘露を見た。
「え？あの・・・・・・」
　何を話せばいいのか分からない。それに、アダージオは何も知らないようだった。
「何のことだね？甘露クンと何の関係があるのだ？精霊界のことはまだ分からないことが多い。人間が介入出来るわけがないだろう？それより、お友達のことを名指しで非難することは止めなさい。・・・・・・さあ、授業を続けますよ」
　アダージオがそう言うと、やっと東雲は黙った。不満そうな、納得のいかない顔をしているが、アダージオに何を言っても無駄だということが分かったのだろう。
　しかし甘露は心が休まらなかった。皆がチラチラとこちらを見ているし、時々ヒソヒソと喋っている。東雲の発言が皆に与えた動揺は大きい。
（東雲さんはどうしてあんなことを言ったんだろう。昨日、ジャスパー先生から聞いた話を知っている？でもどうして？先生は、まだ原因が分からないうちは公にするつもりはないと仰っていた。アダージオ先生も知らないみたいだったし。ツェロが話すわけないし、もちろん僕も言っていない。・・・・・・もしかして）
　甘露は理由に思い当たってハッとした。ジャスパーの部屋からの帰りに、ツェロと話していたではないか。あのとき、聞いていた者がいたのだ。廊下がとても静かだったので誰もいないと思っていたが、皆、魔法使いなのだ。甘露は自分のうかつさを後悔した。
（どうしよう。何人くらい聞いていたのかしら。ジャスパー先生が注意して下さっていたのに、

僕は事の重大さを分かっていなかった。そうか、先生が心配していたのはこういうことか）
　正しい情報が与えられないまま、甘露に疑いの目が向けられている。まるで甘露一人が悪者みたいだ。皆、不安がっていた。特に木の精霊持ちのコの不安は大きい。情報量が少ないから、甘露に興味が集中するだろう。甘露は、すでに教室に漂う嫌な空気を感じていた。

　休み時間になると、ヒソヒソ声は一層ひどくなった。もうヒソヒソどころの話ではない。中には甘露に直接聞いてくる者もいた。東雲も、数人の女生徒と一緒に甘露のところに来た。
「私はまだ納得していないわよ。あなた、何か知っているんじゃないの？」
「僕は何も知らないよ」
　東雲は整った顔をしているので、笑っていないときには妙な迫力がある。甘露は内心、びくびくしていた。
「そうやって、また青嵐の気を引こうとしているんじゃないでしょうね？」
「えっ？なんのこと？」
　甘露がキョトンとしていると、東雲は疑わしそうに見ていたが、あきらめたのか小さく溜息をついた。
「まあ、いいわ。青嵐のことは許してあげる。でも精霊のことは、何とかしなさいよ」
「何とかって言われても・・・・・・」
　言いがかりとしか思えないセリフに、甘露は弱り切った。
　その日の授業は散々だった。何をやっても上手くいかない。ダイヤも冷たいし、クラスの雰囲気も悪い。なにより甘露を打ちのめしたのは、魔力が全く無くなっていることだ。段々弱くなってきていると思っていたが、今日はついに、魔力が消えた。
（他の人は、魔力が弱まったとしても、無くなるわけではないのに。どうして僕だけ？魔力の無い魔法使いなんて・・・・・・。そうか、僕は普通の人に戻ったんだ）
　やっとのことで一日を終え、逃げるように教室から出た。廊下を歩きながらも、他の生徒たちがこちらを見ている気がしてならない。足早に歩く甘露は、途中でマゼンダに会った。
　マゼンダは二つ年下の女の子で、木の精霊持ちだ。彼女は甘露を見つけると、ずんずんと近寄ってきた。
「今日は一人なの？」
　甘露はビクッとした。やたらと女の子に声をかけられる日だ。マゼンダはダイヤにはよく声をかけるが、甘露に話しかけてきたのは初めてだった。彼女は元気いっぱいで可愛らしい顔をしているが、今は甘露を軽くにらみつけている。
「なんとかしてよ。このままでは、今月の成績はビリよ」
「なんのこと？僕には関係ないよ」
　甘露がやっとそう言うと、マゼンダは頬を膨らませた。
「あなたが原因だって、噂になっているわよ」

「ちょっと、マゼンダ、マゼンダ」
　突然、話に割って入ってきたのは、モミジだ。モミジはマゼンダの腕を軽く引っ張った。
「止めなよ、マゼンダ。ただの噂だろ」
「だから本人に聞いているの。私は心配してあげているのよ」
　マゼンダはモミジにそう言うと、甘露のほうを向いて微笑んだ。
「ね、青嵐さんに頼んだら？彼ならきっとなんとかしてくれるわよ。あなたから頼めば絶対、親身になってくれると思うわ」
（また青嵐か。どうして女の子は青嵐のことを言うのかな）
　甘露は東雲とマゼンダが逆のことを言っていると、すぐには気付かなかった。
　モミジも親切だった。競争みたいに甘露にアドバイスする。
「ダイヤも心配していたよ。ダイヤに相談した？」
　マゼンダがモミジをにらみつける。
「甘露は青嵐さんに相談するのよ。仲良しなんだから」
　甘露は黙っていた。今やっと、マゼンダが何を考えているのか、なんとなく分かってきたのだ。それは楽しい考えではない。本当に甘露の心配をしているのではなく、自分の利害を考えているのだろう。双子の忠告が蘇る。
　モミジはこの状況を理解しているのだろうか。モミジはマゼンダの邪魔をしながら、ダイヤとの仲を修復するように勧めてくれた。でも本当にそこまで分かって言っているのだろうか。もしかして、甘露とダイヤがぎこちなくなっていることも、マゼンダがダイヤを好きなのだということも、知らないのではないか。マゼンダが甘露を罠にかけようとしていることも。
　ふいに、モミジに手を取られる。
「行こう、甘露。帰るところなんだろ？」
　いつもより積極的なモミジが意外だった。
「ちょっと！どこ行くの？」
　憤慨するマゼンダを置き去りにして、二人、手をつないで歩く。甘露はモミジに引きずられるように歩いていたが、ふと立ち止まった。
「待って、モミジ。僕、ちょっと学校に用事を思い出したんだ」
「甘露」
　モミジは少し考えてから、ためらいがちに口を開く。
「マゼンダを許してあげてね。さっきのマゼンダはなんというか・・・・・・様子が変だったね。僕には何のことだか分からなかったけど、嫌なカンジだと思ったよ」
「そうか、分かっていなかったのか。でも勘はいいね。うん、僕は困っていた。助かったよ、モミジ。ところでモミジも、僕の噂を聞いたの？他の学年にまで広まっているってことか」
　甘露は言いながら、心が重くなってくる。魔法学園の伝達力を侮っていた。それに内容のせいもある。皆が心配している、精霊に関する話なのだ。
「甘露、僕が聞いたのは、甘露のせいで精霊がいなくなるって話だよ。ひどいよね。誰かが甘露をイジメているんだろ？」

　甘露のせいで精霊がいなくなるわけではないが、何か関係があるらしいという話ではあるので、甘露は噂を否定しきれなかった。どう説明すればいいのか悩む。
（僕自身、どういうことか分かっていないのだから、上手く説明できないな。それにどんなに説明したって、また違う噂が流れるだけじゃないかしら。解決していないのだもの）
「モミジ。上手く説明できないけど、これだけは信じて。僕は何もしていないんだ。何も悪いことはしていないんだよ」
「うん。信じてる」
　モミジが一途な瞳でうなずくので、甘露は可愛く思って手を握る。
「ありがとう・・・・・・じゃあ、行くね」
　甘露は少し微笑んでみせてから、モミジと別れ、校舎に引き返す。そして正面玄関の横にある事務室へと向かった。休学を申し出るためだった。

　ツェロは純朴な男だ。服などには構わないから、いつも似たようなデザインの服ばかり着ているし、髪がぼさぼさでも気にしない。でも真っ直ぐな性格をしており、自分に正直だ。
　彼は夕方、すでに薄暗くなり始めた道を寮に向かって歩いていた。その日はツイていなかった。人の心配ばかりしているツェロは、考えることが多すぎて授業中ぼうっとしており、居残りを命じられたのだ。それで帰りが遅くなり、一人でとぼとぼと歩いていた。
（ジャスパー先生のところに寄れなかったな。まあ、今のところ進展はなさそうだけど。早く甘露の件が解決するといいけどなあ。・・・・・・今日はヒイラギを見かけてないな）
　ツェロは空に一番星を見つけて、いろいろなことを祈った。

「ただいま」
　ツェロが部屋に戻ると、甘露が一人でカバンに服を詰めていた。
「おかえり、ツェロ」
「あれ？今度はどこの部屋に行くの？」
　ツェロが笑いながら問いかけるのを、甘露は違う質問で返した。
「ねえツェロ、ジャスパー先生のところでカードを見せてもらったときのことを、覚えている？」
「え？ああ」
「先生がカードをしまう瞬間に、何か気が付かなかった？」
　ツェロは首を捻った。先生の部屋でカード占いは何度も見ている。もう慣れてしまっているので、甘露が何のことを言っているのか、分からなかった。
「さあ？いつもと変わらなかったような気がするけど。何かあった？」
「花の香りがしなかった？」
「花の香り？」
　ツェロはますます首を捻る。甘露は真剣な顔をしていた。
「僕は感じたんだ。先生がカードをしまう瞬間に、甘い香りを嗅いだんだ。それが何だか、ずっと考えていたんだけど、あれは花の香りだよ。僕の故郷の花の香りにそっくりだった」
「ふうん。それは不思議だね」
　相槌を打ちながらも、ツェロには甘露が何を言いたいのか分からない。どうして甘露が少し興奮しているのかも。戸惑うツェロに、甘露が言う。
「それで僕、ちょっと家に帰ってこようと思うんだ」
「ふうん・・・・・・ええ！？」
　ツェロは驚いて大きな声をあげてしまい、慌てて声を低めた。
「ちょっ、どうして？話が見えないよ、甘露。学校はどうするんだい？」

「学校は休学するよ。さっきその手続きをしてきたんだ」
　ツェロは驚きに声もない。それでは甘露は、しばらく戻ってこないつもりなのか。甘露の行動の早さにも驚いていた。
　甘露はそんなツェロを見て、ためらいながら言う。
「実は僕、魔力が無くなってしまったんだ。他の木の精霊持ちの人たちは、魔力が弱くなっただけなんでしょ？僕の場合は、完全に無くなってしまったんだ。そんなのおかしいよ。アダージオ先生だって、一度精霊と心を通わせたら、彼らが去っていくことはないって仰ったんだ。でも僕は、魔力を無くしてしまった。・・・・・・普通の人になってしまったら、ここにいる資格なんてないだろ？」
「ちょっ、それは・・・・・・判断するのは早すぎるんじゃないか？もう少し様子をみたらどうかな？」
　しどろもどろしていたツェロが、ハッと気付いて勢いづく。
「そうだ、ジャスパー先生が仰っていただろ？甘露は魔力が強いって。だからこれは一時的なものさ。心配しなくても大丈夫だよ」
　甘露は半信半疑だった。ジャスパー先生のことは信じたいが、そもそも自分の魔力が強いというところから信じられない。それに一度決めてしまうと、落ち付いてきた。
「ツェロ、僕はちょっと家で静養してくるだけだよ。だから退学じゃなくて、休学なんだ。いつかきっと、ここに戻ってくる」
「甘露・・・・・・」
　ツェロは甘露の揺るがない目を見て、理解した。
「いつ発つの？」
「明日にでも。もう学校にはいられないんだ。ジャスパー先生には、ツェロから言っておいてくれる？」
「もう決めたのか」
　甘露は少し悲しそうな顔をした。
「僕が家に帰ることを、まだ誰にも言わないで。騒がれたくないんだ。白玉たちには僕から言うよ」
「誰にも？ダイヤにも？」
「そう。ダイヤにも」
　皆、どうしてダイヤのことを問うのだろうと、甘露は思った。こんなに脆い友情だったのに。
（いつかソラト学園に戻ってきたとき、ダイヤは僕のことを覚えていてくれるのかしら。もし、僕の魔力が戻らなかったら？戻ったとしても、何年もかかってしまったら？ダイヤが先に卒業してしまっていたら？）
　ふと、このままお別れになってしまうかもしれないと思い、甘露は小さく震えた。

翌朝、甘露は早い時間に起きた。ツェロと双子は、まだ寝ている。
甘露の家は子供が移動するには遠い。主な移動手段は馬車だが、遠距離には気球を使う。街には気球を飛ばす魔法使いのグループがいるので、彼らに頼むのだ。上手く日程が合ってなおかつ、天候が良ければいいが、運が悪ければ何日も待つことになる。大変だし旅費がかかるので、甘露は学園が長期休暇のときも、これまで一度しか帰省したことがなかった。
道中の治安はいいが、乗り継ぎなどを考えると、なるべく早い時間に出立したほうがいい。それに学園の皆が登校する時間では目立ってしまうから、うんと早朝に出ることにした。それで、まだ夜が明け切らないうちに起床したのだ。
ツェロと双子には、夕べのうちにサヨナラを言ってある。双子は、なかなか納得しなかった。帰省することはそんなに不思議なことではないと説明したが、状況が状況なだけに、双子は訝しみ、寂しがった。
甘露がカバンを持ち、そっと部屋を出ていこうとしたとき、ベッドの中から声がする。
「かんろぉ。絶対、戻ってくるよね？」
「白月。ごめん、起しちゃった？」
甘露は、不安そうな顔をする白月に笑いかけてみせた。白月は顔を横に振る。
「戻ってくるって、約束して」
「うん。戻ってくるよ。約束する」
甘露が妙な噂をたてられても、信じてくれる人はいる。ツェロも双子も、甘露には兄弟のような存在だ。
白月のふっくりした頬に、涙の跡が残っていた。甘露がいくら戻ってくると言っても、不安感が拭えないのだろう。学園の重苦しい雰囲気、甘露一人を悪者にしようとする不気味さ。甘露が本当に戻ってくることが出来るのか、白月は心配しているのだ。
「心配しないで待っていて。必ず戻ってくる」
甘露は自分にも言い聞かせるようにそう言って、白月のサラサラの髪をくしゃっと乱す。そして静かに、部屋を出ていった。

廊下はまだ薄暗く、静かで誰もいない。少し肌寒く感じた。甘露は物音をたてないように歩いた。玄関には鍵がかかっていなかった。いつもなら厳重に魔法がかけてあるが、管理人に早朝に出掛けることを言うと、ではそれより早い時間に開けておくと言われたのだ。もしまだ開いていなかったら、管理人に頼みに行かなければならないところだった。
（本当にダイヤに何も言わないで出てしまった）
甘露は門に向って歩いていたが、ふと振り返って寮を見た。ここからダイヤの部屋は見えない。
（白月にはあんなこと言ったけど、僕はここに戻ってこれるのかしら。もしかして、これが見納めになるのかもしれない）

　甘露は少し悲しい気持ちになる。本当はただの帰省ではなく、終わりの分からない休暇だ。気持が沈んできて、下を向いて歩いた。考え込んでいたので、門のところに来るまで、そこに人が立っていることに気付かなかった。
「青嵐・・・・・・」
　青嵐は門にもたれて立ち、甘露を見て爽やかに微笑む。甘露は驚いて目を丸くした。
「ひどいな、甘露。オレに何も言わずに出ていくなんて」
「どうして分かったの？」
　甘露は本気で聞いたのに、青嵐はおどけてみせる。
「どうして分かるんだろうね？」
「もしかして、予知能力があるの？」
「さあ？どうだろう。勘だよ。これまでの出来事と情報での勘さ。それより甘露、昨日は大変だったみたいだね」
　青嵐が近寄ってきて、腕を開く。甘露は青嵐に抱き寄せられて、心が緩んだ。優しくされて泣きそうになる。
「僕・・・・・・どうしていいのか分からないんだ。僕の知らないところでどんどん話が大きくなっていく。僕は何もしていないのに」
　本音を吐露すると、涙が出てきた。青嵐が慰めるようにぎゅっと抱きしめてくれる。
「つらいな。誤解されるのはつらいよな。でもいつか皆に分かってもらえるさ。大丈夫だよ。それに甘露、甘露は前進するんだろ？」
「前進？違うよ、僕は逃げるんだ。ツェロと双子にはちょっと帰省するだけとか言っているけど、本当はつらいから逃げ帰るんだ。もしかしたら、もうここには帰ってこないかも」
　ずっと我慢していたのに、つい弱音を吐いた。なぜか青嵐には正直な気持ちを言ってしまう。
「そうか。それでもいいさ。甘露がそうしたければ、そうすればいい。今の甘露には、休養が必要なんだ。お前は無意識に、今一番大切なことを選びとっているのさ」
「僕を甘やかしてくれるの？」
「そうじゃないよ。これは必要なことなんだ。そのうち分かる」
　甘露には青嵐の言っていることがよく分からなかったが、否定されなかったことに安堵した。青嵐に帰省を反対されたら、つらかっただろう。広くて暖かい胸に顔をうずめると、安らかな気持ちになる。いつまでも彼の腕の中にいたかったが、そういうわけにもいかない。
「ありがとう、青嵐。僕、行くよ」
　甘露が顔を上げると、青嵐がオデコにキスを落としてくれた。
「幸運を。精霊がお前を守りますように」
　青嵐の腕から解放され、甘露は泣きそうになるのを我慢した。そして青嵐の手をギュッと握って、別れがたい気持ちを断ち切る。無理にニコリと笑ってから、家に向かって歩きだした。
（さようなら、青嵐。さようなら、僕の初恋）
　思えば、これは恋だった。淡くて、形になる前に失恋してしまったけれど。振り向きたい気持ちを抑えて、足早に歩く。甘露はもう、下を向いていなかった。上り始めた太陽が甘露を照らす

。緑の中に伸びる道を、しっかりと進んでいった。

　甘露は歩くのには慣れていた。村での移動手段は馬車しかないので、近いところならば歩くのが常だ。甘露の旅程は、まず歩いて乗合馬車の乗り場まで行き、馬車でエンジ・タウンへ行く。気球のための空港があるので、そこから気球に乗り、中継点で１回乗り継いで瑪瑙町まで飛ぶ。そこからは気球がないので、また乗合馬車に乗ってツリイ・タウンまで行く。そこから甘露の村までは乗合馬車もないので、歩きだ。
　その行程を思うと、甘露は気が遠くなりそうだった。でも考えてみれば、久しぶりに家に帰れるのだ。両親と姉に会えるのが楽しみだ。
　まずは乗合馬車の乗り場まで、歩いていかなければならない。学園は山の麓近くの小高い、街から少し離れた場所にある。街の喧噪の中では誘惑も多いし、魔術を学ぶには薬草などが近くにあった方がいいので山の中にあるのだ。それでも、学園には街の有力者が訪ねてくることもあるので、馬車が通れるくらいの広い道がついている。その道を甘露はてくてくと歩いた。ところどころに木立があり、緩やかなカーブになっている。じきに学園は見えなくなった。道は少しずつ下っていき、見晴らしの良い平地に出る。そこからは一本道ではなかった。十字路を超えると、小さく区画された畑が並ぶ。しばらく歩いていくと、農家の人たちが住む小さな町があった。数件の集落の中を抜けた先に、乗合馬車の乗り場がある。
　馬車は一日にせいぜい一本か二本だ。学生が長期休暇に入る時は増便されるが、この時期はお客がいないので便数が少ない。気長に待つしかなかった。乗り場には小屋が併設されていて、長時間待つ人のための休憩所になっている。小屋には誰もいなかった。甘露は小屋に入ると木の椅子に座り、ぼんやりと馬車を待った。
（今日はどこまで進めるかしら。うまく宿屋に泊れるといいけど）
　以前帰省した時には父が迎えに来てくれて、一緒に帰ったのだ。今回は急に思い立ったし、理由が理由だったので、初めて一人での帰省だ。甘露は少し心細くなってきた。
（父さんや母さんは、僕が突然帰ったらびっくりするかな。どう言えばいいんだろう。もし僕が学園を辞めたいなんて言ったら、村の皆もがっかりするかしら）
　帰ってからのことを考えていなかったので、今になって心配になってきた。村の人たちは甘露が魔法使いになると期待しているのだ。長期休暇でもない時期に帰郷すれば、皆も不思議に思うだろう。そんなことを考えていると、ガラガラと馬車の音が聞こえてきた。外に出てみると、それは乗合馬車ではなく、荷物を運ぶ馬車だった。
「おじさん、おじさん」
　甘露は、馬車を操る農夫に声をかける。
「どこまで行くの？街まで行くなら乗せて欲しいけど」
「どう、どう」
　馬車を停めた農夫は、よく見ると若い男性だった。農夫は皆、同じようなだぼだぼとした服を着ているので、幼い甘露には相手の年齢を推し量ることが出来なかったのだ。だが麦わら帽子の下の日焼けした顔は無邪気に微笑んでいて、キラキラした目を甘露に向けてきた。

「いいよ、隣りに座れよ。これから街まで行くところだ」
　後ろの荷台には、野菜がたくさん乗っている。収穫した野菜を街へ運ぶところなのだろう。甘露は、荷台の前に渡された木の板の上に座った。馬車はサスペンションが悪く揺れがひどかったが、乗せてもらえるだけラッキーだ。
（僕は運がいい。乗合馬車を待っていたら、いつになるか分からないもの。街に着くのが遅くなったら、余分に一泊するところだった）
　そんなことを考えていると、農夫が話しかけてきた。
「今年は不作だよ。全ての野菜の収穫が少ない」
「え？」
　甘露は急に話しかけられ、隣に座る農夫を見上げる。
「だいたいに今年は実の生りが悪かったんだが、ここ数日で急にひどくなった。枯れたものもあるんだ。お前さん、ソラト学園の生徒さんだろ？何か聞いていないかい？精霊界のこととか」
　農夫の言葉に、甘露はドキリとした。まさか学園を出てからも精霊のことを聞かれるとは思ってもいなかった。この男は甘露が渦中の人とは知らずに聞いているのだから、甘露は、何も知らないと答えればいい。実際、原因が分かっておらず、答えようもないのだから。だがここまで影響が出ていたとは。学園の狭い世界にいた甘露は、外でも精霊の件が大きな問題になっているという実感がなかった。今、そのことを知り、ショックを受ける。
「いえ、僕は詳しくは・・・・・・いえ、何も知りません。どうしてこんな」
　上手く言葉にならず、黙りこむ。農夫は小さく溜息をついた。
「そうか。では気のせいかな。まあ、農業は自然相手だから、豊作、不作と年によって違いはあるさ。だからそんなに気にしたことではないのかもしれないが。でも作物によって生り年とハズレはあるが、全部が悪いというのが、なあ。原因が分からないんだ。そのうえここ数日で、急にひどくなるときた。天気が悪くないのにこんなに急に悪くなるなんて、少し変だと思ったのさ」
　農夫の言うことは当たっている。彼は勘がいいのだろう。魔法使いになれるほどではなくても、無意識に精霊と心を通わす人はいる。彼はこれまで野菜を育ててきた経験と、精霊に対する感性で、何かを感じ取っているのかもしれない。もしかしたら、これからもっとひどいことになるのだろうか。今はまだ、鋭い人が気付く程度だが、誰もが気付くくらい世界が変わる可能性だってある。
　甘露は不安にかられた。今まで自分の問題だと思っていたが、ひょっとしてもっと大きな問題だったのだろうか。学園の中で少し噂されただけで居たたまれなくなり出てきてしまったが、そんなことは世界の問題の前では小さなことだったのか。
（僕は自分のことしか考えていなかった。自分がつらいとか、つらくないとか。でもこれが本当に世界の問題だったとしたら？学園には味方もたくさんいた。一緒に考えてくれる人がたくさんいたのに。青嵐、ツェロ、僕はどうしたらいい？）
　そうしている間にも馬車は進み、畑を抜けて野原を進んでいく。この辺りは荒れ地が少ない。本来、パワーに恵まれた土地なのだ。そういったパワースポットを選んで学園を建てたのだから、この辺りも良い場所なのだ。だが言われてみれば、いつもより枯れた草が目立つ気がする。思

い悩んでいるうちに街が見えてきたので、甘露はとりあえず帰郷するとして、考え事は後回しにした。
　エンジ・タウンは小規模だが、なんでも揃っている街だ。近くに学園があることで栄えた街で、ここが交通の基点の一つにもなっている。あちこちの方角へ向かう馬車や気球がここから出発するため、人の出入りがあって活気に満ちていた。街の中央近くには乗合馬車の大きな駅舎があり、周りに宿屋や商店が並ぶ。市場へ向かう農夫とは途中でお別れだ。甘露は農夫に礼を言って、荷馬車を降りた。
　街の中程へ向かうと、次第に人が多くなる。都会で暮らしたことのない甘露は、人に酔いそうになった。キョロキョロすると余計に気分が悪くなると分かっているのだが、つい、珍しいものばかりで周りを見てしまい、やはり気分が悪くなる。
（早く家に帰りたい。早く皆の顔を見て、あの木に挨拶がしたい）
　精霊が宿る木のことを考えると少し安らいで、気分が良くなった。甘露はそれからずっと、木のことを考えながら行動することにした。
　気球乗り場は街を越えて、少し郊外にある。乗合馬車の駅に比べると随分小さな建物だ。甘露が乗り場に着くと、まさに気球が飛び立とうとしているところだった。
「お前は運がいい。東南行きの気球に空きがある」
　魔法使いの一人がそう言って、甘露を迎える。気球にはすでに乗客が二人乗っていた。甘露が料金を払い気球に飛び乗ると、本当にすぐ離陸する。気球を飛ばすには準備に時間がかかるものだが、甘露は調度良いタイミングで到着したようだ。
（あの農夫のお陰だな。乗合馬車を待っていたら間に合わないところだった）
　気球は魔法使いが飛ばすため、便が少ない。今回のようなことは滅多にない幸運だ。旅は順調だった。中継点でもすんなりと次の気球に乗ることが出来たため、一日で驚くほど進むことが出来た。
　だが瑪瑙町で気球を降りるとき、気球を操っていた魔法使いが乗客に驚くことを言う。
「気球はしばらくお休みにするので、そのつもりでお願いします」
　乗客たちは驚いて騒ぎ出す。口々に不満を言った。
「そんな！困るよ」
「帰るときはどうするんだい？」
　魔法使いは苦笑を浮かべる。
「馬車で移動するしかないでしょうね」
　甘露には、どうして魔法使いたちが休業するのか分かっていた。魔力が不安定になっているのだ。魔法使いたちは土の精霊に働きかけて気球を手放してもらい、水と火の精霊の力で気球を飛ばす。後は風の精霊に導いてもらうわけだから、木の精霊持ちの魔法使いはサポートだけで、直接は関係ないはずだ。だから今までは、木の魔力が弱くなってもなんとか飛ばすことが出来たのだろう。でも今はそれすら危ういほど、ひどくなっているのか。
（少しずついろんなところに影響が出てきているんだ。僕たちの生活も不便になってしまうのかな。それにしても、帰りはどうしよう。乗合馬車では何日もかかってしまうなあ）

甘露はふとそんなことを考え、帰りの心配をしている自分がおかしくなった。まだ希望を失くしていないのだ。
学園寮を出るまでは不安だったが、出掛けてみるととても順調な旅で、今までにないほどタイミングよく移動出来た。甘露には魔力が消えたが、まるで精霊の恩寵があるようだった。
瑪瑙町からは乗合馬車でツリイ・タウンを目指す。ツリイ・タウンは甘露の村から一番近い町で、ここまでは乗合馬車がつながっていた。そこから先は、公共の交通機関がないので歩くことになる。ツリイ・タウンからは早朝に出ないと、家に着く前に日が暮れてしまう。町外れの安宿に泊まり、体調を整えてから甘露は歩いて家に帰った。
その日はどんよりとした天気で、空は曇って灰色だ。今にも雨の降りそうな湿った空気の中、甘露は荒れた土地を歩いていった。硬い土地で、畑にはあまり向いていない。甘露の村の人たちは、小さな畑の少ない収穫だけではやっていけないから、たいてい畑以外にも仕事を持っていた。甘露は何度も休憩しながら夕方近くまで歩く。普段なら回復の呪文や足の痛くならない呪文を使うところだが、それが出来ないのでつらい道行きだ。だがもうすぐ家に帰れることが嬉しいので、苦にはならない。
集落が見えてくると、甘露はわくわくと心が躍った。小さいけれど、懐かしい村。エンジ・タウンの活気からはほど遠いけれど、帰ってきたという安堵感で一杯になり、走り出したいくらいだ。甘露の家は村を通り過ぎた、外れにある。小さな家のドアを、彼は勢いよく開けた。
「ただいま！」
家の中には母と姉がいた。
「甘露！一体どうしたの？学校は？」
母の橙が驚いて声をあげる。驚きと、喜びの声だ。
「えへへ。ちょっと帰ってきちゃった」
甘露は照れた笑いを浮かべながら、橙の胸に飛び込む。今は暗い話などする気はなかった。それに久しぶりに母に会えたことが、単純に嬉しい。
「帰ってきちゃったじゃないでしょ。帰ってくるならどうして連絡しないの？」
橙も叱るような口ぶりだが、幼い我が子に会えた喜びを隠しきれない。姉の風花も編み物の手を止めた。
「知っていたら、父さんが迎えに行ったのに。大変だったでしょ？」
「ううん。大丈夫だったよ。それで父さんは？」
「薪を拾いに行っているよ。もうじき帰ると思うけど。今日は雨が降りそうな天気だからね」
橙はそう言いながら、甘露に何か暖かい物を飲ませようと台所へ向かう。甘露は慌てて言った。
「僕は何もいらないよ。ちょっと外を見てくるね」
「え？今帰ったばかりなのに、どこに行くの？少し休憩したら？」
「すぐ戻ってくる。木に挨拶してくるだけだよ」
甘露は橙の返事を待たずに、元気よく外へ飛び出した。のんびりと家で座ってなどいられない。甘露は木に会うために帰ってきたのだ。

家の裏手へ周り、小さな丘を上っていく。数本の木立に囲まれて、彼女は待っていてくれた。冬が近い今、葉は落ち寒々とした光景だ。だが甘露にはその中にもひっそりとした息使い、じっと春を待つ静かな佇まいを感じる。
「ただいま」
そっと幹に触れてみる。そこから優しさが伝わってくるようで、甘露はうっとりと目を閉じた。
「やっぱり僕、キミと離れてはいられないよ」
そうしていると魔力が戻りそうな気がしてくる。甘露はいつまでも、姉が心配して呼びに来るまでずっと木のそばにいた。

晩は家族との楽しい夕ごはんだった。小さなテーブルを４人で囲み、母の手料理を食べる。学園の寮のような豪華な食事ではないが、生まれたときから慣れ親しんだ味だ。
皆、どうして甘露が帰ってきたのか問いただそうとはしなかった。ただ、甘露が帰ってきたことを喜んでいるようだ。父のブラウンは小さな甘露が一人で旅をしてきたことに驚き、どうやって帰ってきたのか、その行程を心配して尋ねてきた。甘露が父の教えを守って慎重に行動したことなどを話すと、ブラウンはニコニコとした。
「そうか、甘露も一人旅が出来るようになったのか。すごいな」
「でもまだ心配よ。出来ればそんなことはして欲しくないわね」
橙が心配そうに言う。甘露とブラウンは顔を見合わせて、微笑みを交わした。
（ほら、母さんの心配症）
言葉にしなくても、甘露には父が考えていることが分かった。それは魔法ではなくて、生まれたときから一緒にいるからだ。
娯楽など何もないので、用事がなければ夜はすぐ寝ることになる。エンジ・タウンのような大きな街には電灯があるが、設備もエネルギーも高価なので、貧しい甘露の村にはない。人が多く栄えている街と、過疎の村とでは生活に大きな差があった。
「甘露」
甘露がベッドに入ろうとしていると、風花に呼び止められる。
「今日は灯りをつけてくれないの？」
前回帰省したときには、魔法で灯りをつけることが出来るようになったことが嬉しくて、家族の前で披露したのだ。
「ごめんね、疲れているんだ。今日は早く寝るよ」
「そう。おやすみ、甘露」
「おやすみ、姉さん」
甘露はどきどきしながらベッドに入る。魔力がなくなったことを風花に言えなかった。甘露が事情を話せば、風花は分かってくれるだろう。怒ったりはしないだろうし、励ましてくれるかも

しれない。でも、がっかりするだろうと思うと、すぐには言えなかった。
（もしこのまま魔力が戻らなかったら・・・・・・学校にも戻れない。そうしたら村の皆も不思議に思うだろうな）
　早いうちに家族に打ち明け、相談しなければならないと甘露は思った。でもどういうふうに説明しようかと考えているうちに、眠ってしまっていた。
　その晩、甘露は不思議な夢をみた。
　気が付くと緑の中にいる。さわさわと葉が揺れる音がして、緑の匂いがした。甘露の意識がとけていく。
　そのうち瑞々しい匂いに混じって、ほのかに甘い香りがしてきた。
（彼女だ。やはり帰って来て良かった。彼女に会えた）
　魔力がなくなってからは感じることの出来なかった精霊の気を、甘露は感じることが出来た。昼間に触れた木の感触がよみがえる。
「甘露。ごめんなさい、甘露。つらい目に合わせてしまったわね。でももう少し我慢して。私とーーーのために。ーーーには休息が必要なの」
　甘露は急に声がしたので驚いてキョロキョロした。目を凝らすと、ぼんやりと人の形が見える気がする。かつて青嵐に見せてもらったときのような鮮明さはないが、たぶん木の精霊が姿を現しているのだろう。
「今、なんて言ったの？誰に休息が必要なの？」
　木の精霊の言葉は、そこだけ分からない。聞こえているのだが、理解出来なかった。
「そのうち分かるわ、甘露。あなたのレベルが上がったら。でも今は忘れてちょうだい。それにこの夢も、私にここで会ったことも、目が覚めたら忘れているでしょう」
「僕は忘れないよ。忘れないよう、努力する。だからまた会って」
　甘露は必死で言った。精霊は甘露の全てだった。今、それが分かった。彼女がいなくなってしまったら、自分が自分でなくなるのだ。
　精霊が優しく微笑んだ気がする。淡いピンク色が次第に薄くなっていき、香りも消える。
「待って！まだ行かないで」
　甘露の叫びも虚しく、またざわざわとした葉の揺れが戻ってくる。
　翌朝、目が覚めると甘露は夢の内容を忘れていた。
（なんだろう。何か大切な夢をみたような気がするのだけれど）
「駄目だ。思い出せない」
　甘露はあきらめてベッドから出る。夢の内容は忘れてしまったけれど、不思議な安堵感は覚えていて、何か良い夢をみたという意識だけが残っていた。

後悔

　甘露がソラト学園を去った日、ダイヤはそのことを知らずにいた。
　朝、ダイヤが学園に行こうと寮を出たところで、ばったり双子に会う。双子はダイヤに駆け寄り、口を尖らせた。
「ダイヤ、どうして甘露に冷たくするの？」
　いきなり白玉に責められ、ダイヤはギョッとする。
「え？何を言ってるんだよ。オレは別に」
「じゃあどうして甘露を一人で行かせたの？」
　ダイヤの言い訳など聞かず、白月も口を開く。双子は順番にダイヤを責めた。
「あの様子だと甘露、当分帰ってこないよ」
「もしかしてもう、帰ってこないかも」
「このまま退学ってこと？」
「ありうるね」
「誰かさんが冷たいものね」
　双子の会話に、ダイヤは慌てた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。一体何の話だ？甘露がどうかしたのか？」
「甘露が家に帰っちゃったんだ」
　白玉の言葉に、ダイヤは呆然とする。
「帰った？こんな時期に・・・・・・何で」
　双子は顔を見合わせ、うなずき合う。白月が口を開いた。
「休養したいから帰省するって、突然言い出したんだ。夕べのことだよ。僕らもビックリした」
「魔力が無くなったことを悩んでいたんだ。このまま戻ってこないかもしれないよ」
　白玉も続ける。ダイヤはそれでやっと事の重大さに気付いて、顔をこわばらせた。
「魔力がなくなった？甘露のか？そんなこと知らなかった」
「ダイヤったら、そこから？本当に何も知らないんだね」
　白玉の非難に、ダイヤは少しムッとする。
「それで、いつ出ていった？」
「今朝早くだよ」
　ダイヤは、甘露が自分に黙って出て行ったことにショックを受けた。甘露とはずっと一緒だと思っていた。仲良しなんだから、何でも話してくれると思っていたのだ。
（でも違った。甘露はオレに相談してくれなかった。双子には話したのに、オレには何も言ってくれなかった）
「ダイヤ、今追いかけたら間に合うかもしれないよ」
　白月の声に、暗い考えが断ち切られる。
「でも・・・・・・」
　ダイヤは迷った。自分に何が出来るというのか。追いついて、それからどうする？

「行きなよダイヤ。後悔するよ」
「うん。そうだな。とにかく、甘露に会わないと」
　ダイヤは迷いながらそう言った。双子がうなずく。ダイヤはやっと、外へ駆け出した。
　残された双子は、走り去るダイヤを見送りながらつぶやく。
「追いつく方に賭ける？追いつけない方に賭ける？」

　ダイヤは門から出て、甘露の姿が見えないかと目をこらした。道は途中で曲がり立ち木に隠れていて、先を見通すことは出来なかった。
「どこまで行ったんだ、甘露」
　ダイヤは雑木林の辺りまで走った。枯れ葉が落ちていて、踏むとかさかさと音を立てる。気をつけないと葉で滑るので、ダイヤは走るのを止めた。雑木林を抜けると道はゆっくりと下り坂になっている。ダイヤは遠くまで見ようとしたが、やはり甘露の姿は見えなかった。
「意外に早足だな。本当に甘露は出て行ったのか？まさか双子の勘違いってことはないだろうな」
　ダイヤは双子のマジメな顔を思い出し、それはないか、と考え直す。双子に焚きつけられて慌てて出てきたダイヤは、ほんの少し歩いて追いつくつもりだった。引き返そうかと何度も思ったが、ここまで来たのだからもう少し行こう、あそこの木までと考えているうちに、乗合馬車の待合所までたどり着いた。だが、そこにも甘露の姿はない。
（この時期は便数が少ないはずなんだが。なんで甘露はいないんだ。もう乗合馬車は来たのか？もしかして今日だけ増便？まさかそんなはずはない・・・・・・やはり双子の勘違い？）
　ダイヤはしばらく考えたが、結局学園に戻ることにした。慌てて出てきたので、ダイヤはお金を持っていなかった。甘露の家がどこにあるのか詳しくは知らないが、遠いことは知っている。それにもしかして途中で甘露を追い越してしまったかもしれないと思った。ここまでの道は１本なので間違えようはないのだが、もしかしたら甘露がどこかで寄り道をしているかもしれない。
（どちらにしても、オレは詳しいことも聞かずに慌てて出てきてしまった。一度戻って考えよう）
　ダイヤはとぼとぼと来た道を帰った。行きは焦って早足だったが、帰りの足取りは重い。心はもっと重かった。
（オレ、何をやってるんだろ。授業もすっぽかして走ったのに。だいたい、なんで双子は甘露を引き止めなかったんだ？あいつらこそ甘露を行かせたくせに、オレに連れ戻せだなんて、おかしいじゃないか。それに甘露は帰りたくて帰ったんだろ。心配しなくてもまた戻ってくるさ）
　ダイヤは一人で歩いていると、あれこれと暗い考えが浮かんできた。薄情な甘露や勝手な双子への怒りでいっぱいになる。ゆっくり学園に戻ってくるとすでに昼近くなっていたので、そのまま寮に向かい、ふてくされた気分で自室に帰った。

　部屋に入ると、ツェロがいて驚いた。ツェロは甘露と同室だが、最近はよくどこかに出かけているらしいので、彼に会うのは久しぶりだ。そんなツェロと自室で会ったので、少し変な気分がした。
「あ・・・・・・こんにちは」
「おかえりダイヤ。邪魔しているよ」
　ツェロはヒイラギに会いに来たようだ。これも意外な気がする。ヒイラギはいつものポーカーフェイスで静かに立っていた。
「おかえりダイヤ。甘露のことは知っていたか？」
　ダイヤはヒイラギの言葉に唇を噛んだ。では双子の言っていたことは本当だったのだ。
「いや・・・・・・知らなかった」
　ダイヤは苛立ちと惨めな気持ちに襲われ、口ごもる。自分だけ知らなかったような気がしてきた。
　ツェロはそんなダイヤの様子に気付かないのか、ストレートな物言いをする。
「ケンカしてるんだろ？謝ってしまえよ。お前たちならすぐに元通りだろ？」
　その言い方が気に入らず、反抗的な気持ちになる。
（そんな単純なことじゃないのに。第一、甘露はいないじゃないか。どうやって謝れっていうんだよ）
　ダイヤは無言で怒った顔をしていたが、ツェロは全く気付いていないようだ。彼は熱心に語りだした。
「ダイヤ、これは大事なことなんだよ。今回の件は、甘露が鍵を握っているんだ。そして彼には支えが必要なんだ」
「は？」
「聞いていないのか？ジャスパー先生の予言のことを」
「予言？」
　ダイヤはキョトンとしてツェロを見た。ダイヤは初めツェロに腹を立てていたが、ツェロの突っ走り気味なトークに、すっかり毒気を抜かれてしまった。
「予言なんて聞いていません。ジャスパー先生の予言？それはどんなものですか？」
「先生が仰るには、甘露は百年に一人の逸材だそうだよ。彼が世界を救うのを、僕たちは見守るしかない。でも精神的な手助けは必要なんだ。ダイヤ、キミが甘露の心の支えになってあげないとね」
　ダイヤはすぐには理解出来ず、目をぱちぱちさせた。ツェロの熱意あふれる口調にも驚く。
（何を言っているのか、さっぱり分からない・・・・・・ツェロってこんな人だったのか。甘露はそんなこと言っていなかったけど。驚きだ）
　実はツェロは敬愛するジャスパーについて語るときだけ饒舌になるのだったが、ダイヤの知るところではない。ダイヤが圧倒されていると、ヒイラギがぽつりと言った。

「甘露は戻ってくるだろうか」
　ヒイラギも甘露のことを気にしているのだ。ツェロはくるりとヒイラギに向き直ると、彼の手を握る。
「心配しないで、ヒイラギ。彼は戻ってくるさ」
「あ、こら、ヒイラギさんの手を握るな」
　思わず言ってしまったダイヤは、ツェロにギロリとにらまれる。
「その時はダイヤ、お前がしっかりするんだぞ。僕も甘露を一人で行かせてしまったことを少し後悔している。お前が一緒に行くべきだったかもしれないな」
　そう言われてダイヤは何でオレが？と思ったが、質問しようとする前に、ツェロはさっさと話を切り上げた。
「僕はこれから用事がある。またな！」
　彼はヒイラギに向かって、じゃあねっ！と片手を挙げて挨拶すると、返事を待たずに慌ただしく出ていった。ダイヤは呆気にとられてそれを見送る。
「えっと・・・・・・ヒイラギさん、ツェロと仲がいいの？」
「いや」
　そっけないヒイラギの答えに、ダイヤは脱力した。少し待ったが、それ以上ヒイラギのコメントはないようだ。
　急に部屋が静かになり、ダイヤは深い溜息をついた。
「実は甘露を追いかけて、馬車乗り場まで行ったんです。でも会えなかった。本当に甘露は帰ってしまったんだろうか」
「そうみたいだな」
　ダイヤはベッドに転がると、疲れた体を休めた。
「オレ、甘露はオレのことだけ思ってくれているのが当たり前だと思っていたんです」
「そうか」
　ダイヤの独り言みたいなつぶやきに、ヒイラギは静かに答える。
「でも違っていた。甘露にはたくさん思ってくれている人がいて、オレはそのうちの一人でしかないんだ」
　ダイヤはそっと目を閉じる。
「今日は疲れたな。午後も自主休講だ」
　ヒイラギは時計を見て、午後の授業へ行く準備を始める。そしてカバンを持つと、部屋を出て行く前につぶやいた。
「ダイヤは、たくさんの中の一人でいることが嫌なんだな。甘露の特別になりたいのか」
「誰だってそうでしょう？好きなコの一番になりたいもの。・・・・・・ヒイラギさんだって、そう思うでしょう？」
　ヒイラギはそれを聞いて苦笑する。
「好きなコの一番か。素直なお前がうらやましいよ。じゃあ、俺は学園に戻るから」
　そう言って、静かに部屋を出て行った。

（素直？オレって素直かな？いや、まったく素直じゃないよ）
　ダイヤは一人きりになり冷静になってくると、これまでの出来事が思い出されてきた。甘露が悩んでいたのに、ダイヤは気が付かないふりをしていたのだ。それは子供っぽい意地と、嫉妬だった。
（オレは甘露が青嵐と仲がいいのが気に入らなかった。腹が立って、甘露にイジワルして、無視して・・・・・・サイテーだよな。それで結局、出て行かれるなんて、オレはそんなこと望んでいないのに）
　まるっきり逆の方向に進んでしまっている。どこで間違えたのか。
　ダイヤの意地悪は自己主張だった。自分が怒っていることを甘露に分かって欲しかったし、どうして怒っているのか考えて欲しかった。でも甘露はそうはとらず、自分の悩みでせいいっぱいだったのだ。
（帰省して休養したいほど具合が悪かったのか。魔力が無くなったなんて、知らなかった。木の精霊の生徒の魔力が弱くなったことは知っていたけど、そこまで深刻だったなんて。甘露はオレに相談してくれなかった・・・・・・当たり前だな。冷たくしていたんだから）
　ダイヤは最近の自分を思い出す。甘露が会いに来たときも、冷たく帰した覚えがある。学園でも無視していたし、東雲に意地悪されたときも助けてやらなかった。昨日はまだ腹を立てていたし、甘露がこんなに急に行動を起こすとは思いもよらなかった。ずっと仲が良かったのに、たまたま喧嘩していたときにこんなことが起こるなんて。
（甘露が戻ってきたら謝ろう。どうしてオレ、あんなに怒っていたのかな。甘露が青嵐とキスしていたからだ。つまり甘露を好きだから？好きだからオレ以外のヤツと仲良くするのが許せなかったのか・・・・・・そんなの言い訳にもならないな。甘露が誰とキスしていようと、オレが甘露を好きなことに変わりはないのに）
　ダイヤは勢いよく体を起こす。
（駄目だ！やっぱりオレ以外のヤツとキスなんかするな！オレ以外のヤツとキス？オレは甘露とキスしたいのか？）
　ダイヤは顔を赤くして、またベッドに倒れこんだ。
（想像しただけで恥ずかしくなってきた。甘露のことを好きだとは思っていたけど友達だと思っていたから、そんな風に考えたことなんてなかった。オレは友達としてではなく、恋人として甘露を好きなのか？・・・・・・どうしよう。甘露は青嵐とキスしていないって言っていたけど、本当かな？）
　ダイヤは一人で百面相をしていた。
（甘露に会いたい。会って謝って、慰めて・・・・・・オレのこと許してくれるかな。そんで、キスさせてくれるだろうか。甘露は女の子とつきあうんだって言ってたな。あれもちょっとショックだった）
　そんなことを考えているうちに、いつしか眠っていた。

　その夢は苦しい夢だった。
　真っ赤な影がメラメラと燃えあがり、周りを焼き尽くす夢だ。炎は赤い影自身をも燃やしている。炎は世界を燃やし自分を燃やし、燃やすものが何もなくなっても、消えることなく赤く揺らめき続けた。
（苦しい。暑い・・・・・・いや、寒い）
　目が覚める。嫌な汗をかいていた。起き上がろうとしても体が重い。
（どうしたんだオレ。風邪でもひいたかな）
　ダイヤはふと、さっきの夢に思い至る。
（夢は精霊からのメッセージだ。嫌な予感がする。そういえば、甘露も魔力が無くなる前に体調が悪かったな。あれは本当に風邪だったのだろうか？もしかして・・・・・・いや、考え過ぎか）
　ダイヤはむりやり重い体を起こした。じっとしていると少しずつ楽になってくる。甘露がいなくなってしまってから、ダイヤは甘露のことばかり考えていた。これまで当たり前のようにそばにいた甘露のことが、いかに大切な存在であったか気付き、苦しくて仕方がない。
（どうして今頃になって気付いたんだろう。誰もが甘露はどうした？とオレに聞いてくることを不思議に思っていたのに。オレより周りの皆の方が、先に気が付いていたのか。オレが甘露を好きだってことに。・・・・・・バカだな、オレ）
「ただいま。あれ？ダイヤ、もう帰ってきてたの？」
　モミジが帰ってきて、ダイヤに声をかけた。
「ああ。学校には行かなかったんだ。甘露を追いかけて、でも会えなくて。お前、知ってたか？甘露が家に帰ったこと」
「え？甘露帰っちゃったの？知らないよ。昨日会った時はそんなこと言ってなかったけど」
　モミジが驚くと、ダイヤもうなずいた。
「そうだろ？急なんだよ。オレに何も言わずに出て行ったんだ」
　少しふて腐れてそう言ったが、モミジは不思議そうに首をかしげる。
「ふうん。まだ喧嘩していたの？僕、知らなかった。青嵐のことで喧嘩してたんでしょ？食堂のとこで」
「え？食堂？」
　今度はダイヤがキョトンとする。甘露と青嵐がキスしていたとは、モミジに言っていなかった。だからモミジの口から青嵐の名前が出たときはドキッとしたが、そのことではないようだ。食堂のところでの喧嘩のことなど、覚えていない。
「違うの？ほら食堂のところで、青嵐がダイヤに声をかけてきたでしょ？あの時、甘露も一緒にいたよね」
「そんなこともあったな」
　ダイヤは苦々しく言った。以前から青嵐のことはあまり好きではなかった。彼はその存在感でダイヤのライバル心を燃やすのだ。たぶん青嵐はダイヤのことをなんとも思っていないのだろ

うが、ダイヤは無意識のうちに青嵐に勝ちたいと感じていた。だからつい、青嵐にはつっけんどんになるし、甘露にはあたってしまう。そんな自分が嫌で、ダイヤはさらに不機嫌になる。負の連鎖だ。
（オレは覚えていなかったけど、そんなことが発端だったのか。それで甘露に愛想を尽かされた・・・・・・いやいや、そんな弱気でどうするオレ。甘露にはたくさん謝らないとな。それで、力になってやるんだ。これからはイイトコ見せて、頼れるオトコにならないとな）
「オレ、甘露を迎えに行こうかな」
　ダイヤが突然そんなことを言うので、モミジは目を丸くする。
「え！？だって甘露んちって遠いんでしょ？」
「気球で行けばすぐだよ。・・・・・・たぶん」
「ただの帰省でしょ？すぐに戻って来るよ。どうしてそこまで」
　モミジに反対されると、ダイヤはますます行かなくてはならない気がしてきた。
「もう決めたんだ。ここでじっと甘露を待っているなんて、出来そうにないや。気になって仕方がないし、甘露が困っているなら助けてやりたい」
　そう言っていると、ファイトが湧いてきた。さっきまで暗いことばかり考えていたが、目的と方法が分かると頑張る気になってくる。ダイヤは元気に立ち上がった。
「よし、オレ今から事務室に行ってくる。甘露の住所を聞いて、ついでに休学の届を出してくるよ」
「今から？」
「明日には出発するよ。早く出れば、もしかして途中で追いつけるかもしれないだろ？気球は足止めくらうことが多いらしいし」
　ダイヤは答える時間も惜しく、喋りながら部屋を出た。晴れやかな気分だった。
（甘露、待ってろよ。オレが迎えに行く。好きだよ、甘露）

　甘露は故郷に帰ってからの数日間を、穏やかに過ごした。
　朝は早く起きて父とハーブを摘み、母の料理を食べる。姉と薬草を使って薬を作ったり、父の畑を手伝ったりする。田舎には刺激的なことなど何もなく、時々、村の人と会うくらいで目新しい出来事は起こらない。でもソラト学園で魔法を学ぶようになってからは、また少し違った視点で生活をみることが出来るようになっていた。家族がおこなっている何気ない生活の知恵が、案外、魔法学とつながっていたりすることもあるのだ。
「ほら、ぼうっとしてないで早く干してきて。今は陽が短いんだから」
「はい」
「踏み台から落ちないように気を付けてね」
「はあい」
　風花は薬草を束にして紐でくくる作業をしていた。くくったものを籠に入れて、甘露に手渡す。甘露はそれを風通しの良い軒先に掛ける係だ。
（姉さんの薬草の知恵って、魔女に近いんじゃないかしら。ソラトの先生には負けるけど）
　甘露は、故郷でも学ぶことはあると感じていた。
（しばらくこうしていてもいいんじゃないかな。焦って学園に戻る理由もないし。ここでだって勉強は出来る）
　ゆったりと時間が過ぎていく。ここには甘露を苦しめる人もいない。時々学園のことを思い出して、友達に会いたくなることもあるが、今はその時ではないと思うことにした。
　そんな日が続いたある朝、甘露が家の外に出ると、小さな木の低い枝に鳩がとまっていた。
「あれ？鳩さん、おはよう」
　鳩は甘露が近付いても逃げようとしない。よく見ると、足に白い布が巻いてある。
「重くないの？僕が取ってあげる」
　甘露は鳩に優しく声をかけると、怖がらせないようにそっと手を伸ばし、布を外してやった。鳩はククッと鳴くと、安心したのか飛んで行ってしまった。布は小さなリボンのようなものだったが、甘露が解くとゆっくりと大きくなり、文字が浮かび上がってきた。
「わ！驚いた。これ手紙だよ。こんな魔法は初めて見たな」
　意外なことに、ヒイラギからの手紙だった。
「甘露、元気にしているか？無事に家に帰れただろうか。
　今は故郷で休養しているのだろうが、出来れば学園に戻ってきて欲しい。
　キミがいなくなってからの学園は、ますます混乱している。今度は火の精霊持ちの生徒が、体調不良で倒れているんだ。
　キミが鍵を握っているのだと、ツェロから聞いたよ。
　こんなことを手紙で急に言われても、驚くだろうね。だが他に手を思いつかなかった。
　お願いだ。すぐに戻ってきてくれ。
　ヒイラギ」

　甘露は驚いて、何度も手紙を読んだ。不思議なことだらけだった。
（どうして突然、ヒイラギさんが僕に？ダイヤでも青嵐からでもなく）
　甘露は親しい間柄のダイヤや青嵐からではなく、それほど親しくはないヒイラギからの手紙だったことが意外で、少しがっかりしていた。だがあることに気付いて、ドキリとする。
「あっ！・・・・・・まさか」
　ダイヤも青嵐も火の精霊持ちだ。つまり二人とも倒れてしまったということではないだろうか。甘露の背中に冷たいものが走った。
（どうしよう。大変だ。すぐに会いに行かなきゃ。・・・・・・でも、僕が戻ってもどうにもならないのに）
　手紙にある、ツェロから聞いたというのはジャスパーが言っていた件だろう。
（ジャスパー先生が言っていた意味は、僕には分からない。いや、誰も、ジャスパー先生も分かっていないのかもしれないな。ヒイラギさんはどんな話をツェロから聞いたんだろう。何か勘違いしているんじゃないかしら。それにしてもヒイラギさんって青嵐だけではなく、ツェロとも仲良しだったのか・・・・・・全然知らなかった）
　クール・ビューティの秘めた熱さを思い出しそうになって、甘露は頭を振る。いろいろなことが脳裏に浮かび、考えがまとまらなかった。甘露に不信感を持っていたクラスメイトたち。甘露に期待する人たち。甘露が学園に戻っても、結局何も出来なくてがっかりさせるだけなのではないだろうか。
「甘露？どうした」
　甘露がいつまでもそこに立っていることに気付いたブラウンが、声をかける。
「あ、父さん。学園の先輩から手紙がきたんだ」
「なんて書いてあったんだ？」
「うん。・・・・・・戻ってきて欲しいって」
「そうか」
　甘露は父の考えを知りたかった。
「お前にも、この家以外に居場所が出来たってことだな」
　ブラウンは少し考える顔になり、しみじみと言う。
「友達は大切にしないとな。わざわざ手紙で呼んでくれているんだろう？戻ってみてはどうかね？」
「うん。そうだね」
　甘露は父に説明していなかった。精霊のことも、自分の魔力が無くなっていることも。そして父も、どうして帰ってきたのか聞かなかった。だから答えはシンプルだ。友達のために帰る。でもそれでいいような気がしてきた。考えても分からないものは、心のままに行動するしかないのだ。決めてしまうと、スッキリした自分がいる。甘露は空を見上げ、学園の方角を向いた。
（ダイヤに会いたい。どうしているの？ダイヤ）
　それは今まで考えないようにしていたことだった。閉じ込めていた思いが、今、急にあふれてくる。ヒイラギからの手紙には詳しいことは書いてなかった。青嵐のことは、彼との仲を内緒に

しているから書かないだろうが、ダイヤの様子は書いてくれても良かったのではないか。心配させまいとしているのだろうか。それともダイヤのことだ、皆が体調不良でも一人だけピンピンしているかもしれない。
（僕のことなんか忘れて、ヒイラギさんと楽しくやっているのかな）
　ズキッとする。ダイヤのヒイラギびいきは、今でもおもしろくなかった。青嵐の恋人であるヒイラギにとって、ダイヤは眼中になかったとしても。
（でももしかして、本当に倒れているのかも・・・・・・だからヒイラギさんが心配して）
　甘露は嫌な予感がしてきて、翌日にも学園に戻ることに決めた。

「もう行くの？もっとゆっくりすればいいのに」
　橙は残念そうな顔をして、甘露の頬を撫でた。
　甘露はヒイラギからの手紙を受け取ると、翌朝早く出立することにした。一度学園のことが気になり始めると、居ても立ってもいられなくなり、すぐにも戻りたくなってしまったからだ。でも家族にしたら急なことだったので、甘露が明日学園に戻ると言うと、母も姉も驚いていた。
「いきなり帰ってきたかと思うと、戻るときも急なんだね」
　風花が少しイジワルを言う。
「ごめん」
「次は連絡してから帰ってきてよ。そうしたら迎えに行けるでしょ。今日だって、もっと早く言ってくれればいろいろお土産を渡せたのに」
「いいよ、そんなの。荷物になるもの」
　甘露が口を尖らせると、風花に頭をこずかれた。
　台所に引っ込んでいた橙が、小さな包みを持ってくる。中には手作りのジャムが入っていた。
「母さん、重いものはいらないよ」
「小さなビンだから大丈夫だよ。父さんに送ってもらうんだろ？」
　ときに母の愛は重い。甘露は母と争いたくなかったので、観念してビンをカバンに入れた。また当分、家族とは会えないのだ。
　父に送ってもらうと言っても、それはツリイ・タウンまでだ。以前は父に学園までついてきてもらったが、今回は一人で行くつもりだ。旅にはお金がかかるので、貧しい家計から旅費を捻出するのは大変なことだ。甘露も入学したての頃よりは成長したし、一人で帰省出来たことで自信がついたので、行きも大丈夫だろう。ただ、恐らく気球が動いていないだろうから長旅になる。ツリイ・タウンからは乗合馬車が出ているので、そこから乗り継いで行くのだ。連結が悪ければ待ち時間も長くなる。必然的に泊まりが多くなることが少し不安だった。
（強くならなくちゃ。ダイヤに会うんだろ）
　甘露は自分に気合を入れる。学園を出たときは心が消耗していたが、家でのんびりと過ごし、精霊の木と触れ合ったことで元気を取り戻していた。それに何か大切なことがあったような気が

する。忘れてしまったけど。
（やっぱり僕には帰省が必要だったんだな。帰ってきて良かった）
　前進するんだろ？と言っていた青嵐の言葉がよみがえる。その意味がようやく分かった。
　馬車の準備をしていたブラウンが戻ってきた。
「そろそろ出るか？」
「うん」
　甘露は外へ出て馬車に乗った。老いた馬が引く小さな馬車だ。馬は田舎ではなくてはならない存在で、薪を運んだり収穫時には荷車を付けて街まで作物を運んだりする。ツリイ・タウンまでは乗合馬車がないので、父に送ってもらえて助かった。
　母と姉に行ってきますを言って、故郷を後にする。小さな集落を通り抜けると、荒れた土地の中の細い道を馬はトコトコと歩いた。あまり速くはないが、自分の足で歩くより楽だ。
　ブラウンは無口な男で、こちらから話しかけなければ何も言わなかった。だから甘露もぼんやりと辺りの景色を眺めながら、これからのことを考えていた。
（ヒイラギさんからの手紙には、ただ僕に戻ってくれとしか書いてなかったけど、僕はどうすればいいのかな。確かに僕は元気になったけど、魔力が戻ったわけではないのに）
　甘露は自分の手を見た。胸には精霊からのペンダントもさげているが、全く反応を示さなかった。帰省したときと、何も変わってはいない。けれどもなぜか、甘露には根拠のない自信があった。それは小さな水滴が集まっていつの間にか大きな流れになるように、甘露の心を満たしていた。それに不思議なことがあったのだ。今朝起きると、枕元に木の葉が落ちていた。不思議に思い、手に取ってみると、心が晴れやかになりパワーがみなぎるようだった。
　そのことを思い出して馬車の上で何度か魔力を試してみたが、残念ながら何も感じられない。迷い、考えながらの旅だ。そうしているうちにツリイ・タウンに着いた。
「大丈夫か？本当に一人で行けるのか？」
　馬車を降りる甘露に、ブラウンが聞く。今さらそんなことを尋ねる父がおかしかった。
「行けるよ。もういいから、父さんは帰って。気を付けてね」
「無理をするな。途中で帰ってきてもいいんだぞ。つらいなら、退学したっていい」
「え！？」
　甘露は考えもしなかったことを言われて驚いた。退学するとは、魔法使いになることをあきらめるということか。甘露の学費は村の皆も手伝ってくれているのだから、そんなことは許されないことだ。それに退学したら学園の皆と会えなくなる。昨日は友達のために学園に戻れと言っていた父が、今度は退学すればいいと言うとは思いもよらなかった。複雑な親心は、まだ甘露には理解出来ない。
「ヘンな父さん。大丈夫だよ」
「そうか。じゃあ、気を付けてな」
「うん」
「道中で日が暮れそうなら、早めに宿に入るんだぞ」
「分かってる」

　ブラウンは別れがたいのか、言うことがなくなっても去ろうとしない。甘露は優しく馬を撫で、軽く叩いてやった。それでやっと、ブラウンは名残惜しそうに帰っていった。
　甘露は父を見送ってからツリイ・タウンに入った。町の中央にある乗合馬車の駅に向かう。ツリイ・タウンはエンジ・タウンほどではないが、それなりに大きな町だ。駄目で元々で瑪瑙町に向かう馬車を探すと、午後からあることが分かった。甘露はそれに乗ることに決めて、待合室のベンチに腰掛ける。待合室には数人いて、それぞれ情報交換をしていた。
「じゃあ、気球はまだ飛んでいないのか」
「そうだな。昨日は飛んでいなかった」
　そんな会話が聞こえてきて、甘露はがっかりする。
（学園に行くのにどれくらいかかるんだろう。馬車の接続が悪かったら、何日もかかっちゃうな）
「全く、どうなってしまうのかね。私が泊まっていた宿にも寝込んでいるヤツがいたよ。主人が困っていたね」
「病気かい？」
「例のアレだよ。有名な魔法使いほど倒れるっていうじゃないか」
　甘露はどきっとして聞き耳をたてた。この町には魔法使いがいないから、旅の途中で倒れたということか。
（例のアレってなんだろう？僕もそういうことがないといいけど。まあ、僕の場合は魔力がなくなったわけだから、倒れるなんてことはないか。でもその人、大丈夫かな。この町には魔法使いがいないから、対処の仕方も分からない。今の僕が行っても、何にも出来ないだろうし）
「有名な魔法使いが来ていたのかい？そりゃ難儀なことだな」
「いや、そういうわけでもないようだ。まだ子供だよ。魔力が強いんだろうね」
「それは将来が楽しみだ」
「でも強すぎて倒れるようではなあ」
　甘露は驚いて立ち上がった。
（子供？ソラト学園の生徒なのかしら。火の精霊持ちが倒れたって・・・・・・まさかダイヤが？いや、ダイヤがこんなところにいるはずがない。ダイヤは学園にいるんだ。ヒイラギさんの手紙にダイヤのことは書いてなかったし。僕の知らない誰かがたまたま・・・・・・自分の力に気付かず、学園に行かない子もいるっていうし）
　そう自分に言い聞かせてみたが、甘露は男たちの会話が気になって仕方がなかった。男たちはすでに自分たちの病気に話題が移っている。
「・・・・・・それで爺さんが転んだときに腰を打って」
「すみません」
　甘露が話しかけると、男たちは何事かと甘露を見つめた。
「その子供が泊まっている宿は、どこにありますか？」

　甘露は教えてもらった宿に向かった。嫌な予感がする。もしかしてダイヤだったらと思うと、胸が苦しい。こんな気持ちのまま馬車に乗ることなど出来なかった。倒れたのが誰なのか確認するのだ。それにダイヤではなかったとしても、放っておくわけにもいかないのではないか。今の甘露には何も出来ないけれど、学園の先生に連絡するか、隣り街の魔法使いを頼るかすれば、何か対処方法があるかもしれない。
　宿はすぐ分かった。大きな通りを少し入った細い通りに木の看板が出ていて、店の中から美味しそうな匂いが漂っている。甘露が扉を開けるとすぐ食堂があり、数人が食事をしていた。
「いらっしゃい。お食事ですか？」
　料理を運んでいた婦人に声をかけられ、甘露のお腹がぐうと鳴った。
「いえ、泊まり客の人に用事があってきました」
「あら。泊まっている人たちなら、ここにいる人で全部よ」
　静かに食事をしている人たちが、甘露をちらりと見た。誰も自分のことではないと判断して、食事に戻る。その中にダイヤはいなかった。
「ここに子供が泊まっていると聞いたのですが」
「え？もしかしてあの子の家族？困っていたのよ」
　婦人は手早く料理を配り終えると、甘露を手招きする。
「こっちへ来て」
　婦人は橙と同じくらいの歳で、白い清潔そうなエプロンをしていた。彼女はエプロンで手を拭いながら店の奥にある階段を上り始めたので、甘露は慌てて彼女の後を追った。二階は客室になっているようで、廊下の両側にドアが並んでいた。
「来るなり倒れたものだから、名前も聞けなかったの。この町には診る人がいないから困っていたわ。とりあえず部屋に寝かせたけど、熱が下がらないもの。彼は魔法使いなの？お客さんが魔法使いにはたまにあることだって言っていたけど、どうしていいのか分からなくて」
　婦人は廊下の一番奥まで進むと、突き当りのドアを開けた。
「あら。この部屋暑いわね」
　婦人が入るなり怪訝な声を出す。続いて入室した甘露も、部屋の暑さに驚いた。部屋は少し広めのいい部屋で、窓が二つついていた。外は冬が近付き寒くなり始めているというのに、まるで火を焚いているかのように暑い。暖炉には火が入っていなかった。
「ダイヤ！」
　大きなベッドに寝ていたのは、やはりダイヤだった。甘露の呼びかけにも答えることなく、目を閉じている。
「まさかと思っていたけど、本当にダイヤだったなんて。どうしてこんなところにいるの？」
　甘露はベッドに近付こうとした。でもなぜか進むことが出来ない。近寄ろうとすると空気が重くなる。まるで見えない壁に阻まれているような抵抗があり、近くへ行くことが出来なかった。
「何これ？ダイヤ！ダイヤ目を開けて」
「今朝まではこんなことなかったんだよ」

婦人はおろおろしたが、彼女も近付くことは出来ない。
「ダイヤ！僕だよ、甘露だよ！」
（まさか・・・・・・このまま死・・・・・・）
甘露は不吉な予感にかられた。自分の魔力が無くなったときすら、こんなに不安にはならなかった。クラスの皆から白い目で見られたときも、こんなにつらくはなかった。でも今、ベッドに横たわる白い顔を見ていると不安で堪らない。彼はこのまま目を開けることがないのではないか。自分は近寄ることすら出来ず、永遠に彼を失うことになったら？胸が恐怖で苦しくなる。どきどきする胸の上に、甘露は手をやった。
「精霊よ、どうかお願いです。ダイヤを助けて」
突然、胸のペンダントが反応した。ほのかに熱をおび、青く光りはじめる。ペンダントは服の下につけていたので、まるで甘露の胸が光っているようだった。
（ああ、やっと。やっと僕の精霊が帰ってきてくれた。本当に？お願い、ダイヤを助けて）
甘露は心から願った。初めて本気で祈った。今まであまり熱心に祈っていなかった甘露が、初めて心の底から強く願った。
ソラトに入学したときから甘露は、あまり真剣に祈ったことなどなかった。精霊と契約はしたものの、自分から望んだことではなかったのだ。ある日突然、夢で精霊に話しかけられただけで魔法使いだなどと言われても、今一つピンとこないし、ソラトに入学したのだって、自分の意思ではない。周りから望まれ、期待に応えようとしただけだ。
でも今は、ダイヤを助けることだけを考えていた。
「精霊よ、木の精霊よ。世界を生み出すその力を、我が前に示せ」
自然に言葉が出た。必死で祈り、手を前に突き出すと空気の壁は無かった。甘露は強い光に包まれたと思うと、その光だけが前に出た。まるで甘露の体が二つに増えて前に抜け出たかのように、光の塊がするりと抜け出たのだ。
甘露自身、何が起こったのか分からず、驚いて光を見た。だがまぶしくて、よく見ることが出来ない。
（な、なに？僕まるで、こうすることを知っていたみたいだった。僕の体から、いったい何が出てきたの？）
その光は徐々に輝きを落とし、人の形に変わった。成人男性のようだが、半透明で深い緑のローブを着た圧倒的オーラの持ち主だ。威厳に満ちたその人が姿を現すと、部屋の中に風が渦巻いた。暑さが和らぎ、植物とオゾンの香りがする。いつの間にか部屋は消え、甘露は森の中にいた。
（ここはどこ？僕は部屋の中にいたのでは？）
木がそびえる中に少し広い空間があり、木々の隙間からこぼれる光で下草が美しい緑をしていた。小さな蝶が飛んでいる。無意識に蝶を目で追っていた甘露がふと目の前の人と目が合うと、全身の産毛がぞわざわするくらいの畏怖を感じた。
「あなたは・・・・・・誰？」
やっとそれだけ言う。よく見ると彼の周りに小さな虫のような精霊たちがたくさん飛んでいた

。それらはまるで宙から湧き出るように増えていく。集まってきているのだ。精霊たちは口々に、見つけた、見つけたと騒いでいた。
「会うのは二回目だ。お前は覚えていないだろうが」
　頭の中で声がして、甘露は驚きで鳥肌が立つ。体を強張らせていると、甘い香りがしてきて甘露の精霊も姿を現した。
「－－－さま、もう加減はよろしいのですか？」
「うむ。やっと傷も癒えた。甘露、お前は気が付かなかっただろうが、魔力をもらっていた。礼を言うぞ」
「へ？は？魔力・・・・・・消えてますけど」
　甘露は素っ頓狂な声になった。突然の展開についていけない。目の前の精霊が誰だか分からなかったが、その圧倒的な存在感から、とてつもない存在であることは分かった。
「元来、魔力は精霊から人間に与えるもの。しかし誰でもいいというわけではない。素質を持った者、精霊からのパワーを魔力に変える能力のある者でなければならない。そしてその魔力の一部を、念として精霊に返しているのだ。お前はその能力が高いが、上手く使えずに溜めこんでいる。だから私が少し貰った。最近は貰い過ぎてしまったな。お前の魔力が消えていたのは私のせいだ」
「魔力を？僕の？貰う？」
　甘露は片言になる。
「そうだ。お陰で傷を早く治すことが出来た」
「あの。傷ってどこか悪かったんですか？世界はどうしてこうなってしまったのです？・・・・・・そうだ、そんなことよりダイヤを治してください」
　ぼんやりしていた頭が少しずつハッキリしてくると、次々と疑問や願いが湧いて出てきた。
　甘露の精霊は彼の横でひざまずくと、甘露にもしゃがむように言う。
「甘露、このお方は木の精霊を統べる者。世界を護る王なのです。失礼なことがあってはなりません。頭を下げて、何も質問してはいけません」
「いいのだ。甘露は私を助けてくれた」
（世界を護る王？もしかして・・・・・・精霊王？伝説の？この人が？）
　王が微かに笑った気がした。そして甘露に向き直る。
「精霊は人に世界の在りようを教えたりはしないのだ。だがお前には教えよう。私のせいで苦労したようだからな。私は火の精霊王と諍いを起こしたのだ。そして少々傷を負ったゆえ、お前の故郷の木の中で眠っていた。この者に匿われていたのだ。それにお前の魔力が私の傷を治すのに役立った。お前の魔力が一時的に消えたのは、私が貰い過ぎたせいだ。他の魔法使いたちの魔力が弱くなったのは、私が隠れて眠っていたことが関係するのだろう。皆が探しておったようだし」
　小さな羽虫のような精霊たちが、王の周りを飛んでいる。その精霊たちが同調するように、小さく震えた。そうだ、そうだと言っているようだった。
　甘露の精霊が補足する。

「偉大なる我らが王。王は我らの宝。心の支えなのです。王が不在ならば、皆の力が弱まるのも当然です。木の精霊の力が弱まったのも、そのせい。人間が弱まるのは当たり前です。甘露にも隠していて、ごめんなさいね」
　微笑まれて、甘露は頬をほんのり染めた。どうにも彼女には弱い。どんなことでも許してしまいそうだ。それにしても、自分一人の問題だと思っていたことが、こんな理由だったとは。
　精霊王が重々しくうなずいた。
「私が眠っている間に、ゆるやかに世界のバランスが崩れたようだな。五人の王に優劣はないし、私一人が世界をどうにかするわけではない。木の精霊たちの力が弱まったことで逆に、力を得た者もいるだろう」
　精霊王が振り向いた方向に、ダイヤがいた。甘露の胸が締め付けられる。
「ああ、ダイヤ。お願い、目を開けて」
　さっきまで森の中にいたと思っていたのに、森と宿の部屋が重なって見えた。まるで同じ空間に違うものが同時に存在しているかのようだった。限られた空間である部屋に、広い森が入るはずがない。混沌とした眺めに、甘露は目が回りそうだった。
　精霊王は、ダイヤに手をかざした。
「この者もバランスを欠いたにすぎぬ。火の力が強すぎても駄目なのだ。だから火の精霊を持つ者は、常に強い精神力を必要とする。まあ今回は、私のせいでもあるのだが。私が眠っていたせいで、他の精霊のバランスも崩れたのだからな」
　精霊王の手から、何かが発せられているのであろうか。甘露にはそれが何だか分からなかったが、王を取り巻く空気の流れが変わったように感じられた。ダイヤの顔色が次第に良くなってくる。青白い頬に赤みが増し、ほどなく目を開けた。
「甘露？」
　ダイヤはまだボンヤリとした顔をしている。
「おかしな夢をみていたよ」
「ダイヤ。心配したよ」
　甘露は彼に駆け寄り、その頬にキスをした。小鳥のさえずりが聞こえる。水の匂いがした。心が満たされて、ダイヤに対する暖かな気持ちがあふれてくる。
（ダイヤ、僕はキミのことをこんなに愛しく思っていたなんて）
　甘露が幸せな気分に浸っていると、精霊王の声がした。
「甘露、お前の魔力は心地良い。もうしばらくお前とともにいよう」
「え？」
　どういうこと？と問うより前に、その気配は消えた。癒しの森も。そこはツリイ・タウンの小さな宿の一室だった。甘露は驚いて辺りを見回す。我に帰るとはこのことか。すっかり存在を忘れていた宿の婦人が目を丸くしていた。
「今のは何？緑だったけど」
　甘露は昂る気持を必死で抑えた。なるべく落ち着いて話すように努力する。
「奥さんにはどう見えたんですか？」

「緑のぼんやりしたものが出てきたら、急に坊やが動かなくなったでしょ。声をかけようとしたけど、私も動けなくなった。何だったの？大丈夫？」
「大丈夫です、ほら、彼も」
　甘露は微笑んでダイヤを見た。婦人は安心した顔をする。
「良かった。やっと目を開けたね。水を持って来るよ」
　婦人が踵を返すと、戸口に別の泊まり客がいた。
「俺、声を聞いたぞ。精霊王って。伝説なんて信じていなかったけど・・・・・・確かに聞いた。本当にこの世に存在するのか」
「精霊王？さっきのボンヤリした雲が？」
　婦人には聞こえなかった声が、この男には聞こえたらしい。婦人も驚いて男と甘露を交互に見た。
（困ったな。この人、少し霊力があるのか）
「あの。このことは内緒にしてもらえますか？騒がれたくないんです。僕自身、何が起こったのかよく分かっていないし」
「内緒に？」
　婦人には意外だったらしく、少し興奮気味だった。
「坊や、もし本当ならすごいことなんだよ。有名な魔法使い様だって、精霊王なんて会ったことないよ」
「そうだ。俺たちすごいもん見ちゃったんだな。坊やは出世できるよ。この宿だって、宣伝になる。精霊王の現れた宿だってな」
　婦人は突然色めきたった。
「そりゃ儲かるね」
　盛り上がる二人に、甘露は慌てて懇願した。
「いえ、僕はまだ勉強中なんです。お願いです、誰にも言わないで」
　婦人と男は顔を見合わせる。明らかにガッカリしたようだ。
「そう・・・・・・分かった。誰にも言わないよ。ところで今日は泊まっていくんだろ？」
「お願いします」
　甘露がそう言うと、婦人はやっと嬉しそうにうなずいた。

　ダイヤはすぐに具合が良くなり、甘露と一緒に食事をすることが出来るほど回復した。食べることが出来るようになると、元気を取り戻すのも早かった。二人は宿で、会えなかった間に起きた出来事を報告しあい、夜はそのまま一緒のベッドに横になった。
　ダイヤが小さなランプに灯をともすと、彼のハニー・ブロンドが甘く暖かい色に輝く。甘露は再会出来た喜びをかみしめた。
「ダイヤ、狭くない？他の部屋が空いてなかったんだ。ごめんね」
「大丈夫だよ。オレが甘露をだっこして寝ればいいだろ」
「だっこだなんて。赤ちゃんじゃないんだから」
　甘露が真っ赤になるのを見て、ダイヤが笑う。
「それにしても、他に部屋が空いていないのに泊まっていくかと聞くなんて、オバさん商売人だな」
「この部屋、ベッドが一つしかないのに二人用なんだって。大きな人だと一人で泊まるらしいけど。ダイヤ、大きな人なの？」
「ここしか空いてなかったからだろ。倒れてしまったんだから拒否出来なかったよ。オレが代金を払えなかったら、どうするつもりだったんだろ」
　ダイヤは口を尖らせる。甘露は驚いた。
「え？この部屋高いの？それでオバさん、スイートルームって言ってたのか。オバさんにお得な部屋ってこと？大丈夫？払えるの？何日泊まったの？」
「大丈夫だから心配するなよ。甘露とスイートルームだなんて、最高じゃないか」
「そうかなあ？」
　怪訝そうに言うと、ダイヤが抱きついてきた。ダイヤの温かさが伝わってきて嬉しい。
「甘露に会えて良かった。甘露が見つけてくれなかったら、オレどうなってたか分からないや」
「僕だって。迎えに来てくれてありがとう。ダイヤと会えなかったら、僕、途中で引き返していたかも。だって気球は飛んでいないんでしょ？ダイヤ、ここまで来るの大変だったね」
「まあ正直、大変だった。ずっと馬車を乗り継いで来たよ。だけど帰りは甘露と一緒だから楽しい旅になりそうだ。それに、オレたちが瑪瑙町に着く頃には気球が飛んでるんじゃないか？木の精霊王が戻ったんだろ？」
「ああ、そうか・・・・・・そうなのかなあ？」
　甘露は気のない返事をした。気球で帰れるとしたら嬉しいけれど、まだ自分が精霊王に会ったのだという実感がない。
「僕、これからどうすればいいんだろ」
　何か特別なことが起こるのだろうか。何かをしなければならないのか。甘露は現状に戸惑っていたが、ダイヤは何でもないことのようにサラリと言う。
「別に、普通にしていればいいさ。精霊王がしばらく甘露のそばにいる？ビックリだよな。オレだってそうしたいよ」

「ダイヤも精霊王に会いたいの？火の精霊王と喧嘩したって言ってたけど、どんな人なのかしら」
「そういう話じゃないんだけど。まあいい。忘れて」
　甘露がきょとんとしていると、ダイヤが近付いてきて頬にキスをされた。軽くちょこんと。唇にもちょこんと。
「甘露は可愛いな。どうしてオレ・・・・・・あんなに冷たくしたんだろう。ごめんな。オレ、甘露に謝りに来たんだ。甘露は魔力を無くして苦しんでいたのに、オレは自分のことばかり考えていた。どうしてあんなにムキになっていたのか、自分でも分からないよ。甘露が青嵐と仲良くしているのを見て、腹を立てたんだ。自分がないがしろにされたみたいで・・・・・・それってやっぱり自分のことしか考えていない。勝手だよな」
　甘露はそれを聞いて、急に涙が出てきた。やっとダイヤが自分の気持ちを話してくれたし、甘露のつらさも分かってくれた。今まで我慢していた何かがどっと溢れ、涙となって出てきたのだ。
「ダイヤ、ないがしろになんてしてないよ。僕はずっとダイヤのことが好きだったんだ。確かに青嵐は優しくしてくれたけど、人のものだし。彼はただ、弟が欲しかっ」
「ストップ」
　ダイヤに手で口をふさがれて、甘露は最後まで喋ることが出来なかった。
「やっぱりヤツの話は楽しくない。ごめん、ヤキモチなんだ」
　甘露は少し驚いて、それから吹き出した。
「ダイヤがヤキモチ？そんなの必要ないだろ？そんだけモテるのにさ。僕なんてマゼンダにイジワルされちゃったよ」
「甘露は分かってないな」
　ダイヤは優しく微笑んで、じっと甘露を見つめる。甘露はダイヤが真剣な目をしているのに気が付いて、ドキッとした。
「ダイヤ？」
　ダイヤの手がそっと頬を撫でる。彼が近付いてきたかと思うと、再度キスされた。今度は深く。
「ん？・・・・・・」
　クチビルを割ってダイヤの舌が入ってくる。甘露は心臓が跳ね上がった。
（こんな、大人のキス。どうして？）
　ダイヤの暖かい舌が動いて、あちこち舐める。甘露は驚いてされるがままになっていたが、そのうち興奮してきて甘露も舌を伸ばした。
「あっ、・・・・・・んんっ」
　絡め合っていたダイヤの舌が離れるのを、つい追いかけてしまった。突き出した舌を舐められ、甘い吐息が漏れる。そうすると再びキスされた。何度も繰り返され、甘露は体をぞくぞくさせる。
（僕、ヘンになってしまいそうだよ。体が勝手にびくびくしちゃう。どうしよう）

　不思議な感覚に甘露は酔った。初めてにしては激しいキスをされてうっとりしていると、ダイヤの唇が名残惜しそうに離れていった。
　二人はしばらく無言だった。何をどう言っていいのか分からず、ただ混乱していた。先に口を開いたのはダイヤだった。
「ごめん。オレ・・・・・・友達にするキスじゃなかったね」
　甘露はドキドキしてダイヤを見る。
「友達じゃなかったら、何？」
「ずっと友達だと思っていたけど、それ以上だったみたいだ。離れてみて分かったよ。甘露のことを、独り占めしたい。ずっとオレのことだけ見て、オレのことだけ考えていて欲しいんだ。他のヤツのところになんて行くなよ」
「それってまるで」
　恋人みたいだね、と言いそうになって驚いた。
（僕のことをそういう意味で好きってことなの？一体、いつから？いつから友達じゃなかったの？）
「待ってダイヤ。あの。それってどういう意味？僕のこと・・・・・・」
「好きだ。好きなんだ。友達じゃなくて、恋人になりたいんだ。甘露が女の子を好きなのは知っているけど、友達のポジションではイヤだ。甘露のことを、オレだけのものにしたい」
　強い瞳で見つめられて、胸の鼓動が激しくなり、痛いくらいだ。
「僕は・・・・・・ずっと友達だと思っていた。恋人だなんて、思ったこともなかったよ」
　甘露がそう言うと、ダイヤの顔がゆがんだ。甘露は慎重に言葉を選ぶ。
「でも、好きだよ。僕もダイヤが好きだ。ずっと友達だったから、恋なのかどうか分からないけど。ダイヤに嫌われたんじゃないかと思ったとき、すごくつらかった。誰かにとられるんじゃないかって、とても怖かったよ」
　正直にそう言うと、ダイヤは真剣な顔をして暫し考えていた。
「甘露・・・・・・キスしていい？」
　さっきもしたのに、ダイヤがそう聞いてくる。彼は試しているのだ。二人がキスする関係になることを、甘露が許すのかと。
「いいよ」
　甘露があっさり答えたので、ダイヤは息をのんだ。ゆっくりとやってきて、甘露に覆いかぶさる。甘露は何をされるのかと驚いたが、ダイヤの熱くて強い眼差しに心を奪われた。彼のブルーの瞳が濃い色になり、何かを訴えるように見つめてくる。
「好きだ・・・・・・好きだよ。誰にも渡さない。オレのものだ」
　ちゅっちゅと軽くキスしながら、彼が体を寄せてきた。
（ダイヤが熱い。燃えてるみたい。特に腰の辺りが）
　唇だけではなく、顔じゅうにキスされた。ダイヤの唇がだんだん降りてくる。細い首の辺りに吸いつかれ、甘露は喘ぎ声をあげた。同時に服の上から胸を触られ、突起を探られる。
「あん。そんなとこ触っちゃ、ダ・・・・・・メ、だ」

　全身で愛撫しようとするダイヤが、腰も使ってきた。
　ゆったりと腰を擦りつけられ、ぞわぞわと快感が襲ってくる。
「や・・・・・・あ、つい。ダイヤが熱い」
「かわいい。甘露。甘露は可愛いな。オレずっとこうしていたい」
「そ、れは。ダ、メ・・・・・・だよ」
　甘露は本当に困っていて、泣きそうだった。でも嫌ではなかった。認めたくないけれど、キスされ、体を触られて嬉しかった。もしかしてずっとこうされたかったのかと思ってしまうほどに。
（大好きダイヤ。こんなことされて幸せだなんて、僕やっぱりダイヤのこと）
　昨日までの寂しさが嘘のようだった。家族の応援があるとはいえ、甘露は昨日まで不安を抱えていた。木の精霊のことや精霊界のことは分からないことだらけで、ソラト学園に行っても何も出来ないのではないかと心配していたのだ。孤独な戦いを強いられ、皆の期待を裏切ることになったらどうしようかと怖かった。
　それが急に、ダイヤに会った途端に全てが解決した。魔力が戻り、それどころか大きな力の存在を知ったのだ。
「何を考えているの？」
　ダイヤに顔を覗きこまれる。考え事をしていたのがバレたようだ。
「これからのこと」
「オレと甘露のこと？」
「そうじゃなくて」
「え？違うのか」
　ダイヤは残念そうな声をした。なんだよ、とぼやく。
「悩むことなんてないだろ？オレがフォローするし」
　甘露は笑ってしまった。伝説の精霊王のことすら、ダイヤにはどうでもいいらしい。お気楽なダイヤ。甘露は少し気が楽になって、フフフと笑った。
「ずっとそばにいてくれる？」
　何気なくいった言葉に、ダイヤは驚いた顔をする。そして嬉しそうに微笑むと、甘露の手をとり、甲にキスをした。
「万物の王に誓うよ。キミと常しえにいると。離れない・・・・・・甘露。ずっとそばにいてくれる？」
　芝居がかった振る舞いも、美しいダイヤがするとさまになる。まるでプロポーズみたいだと思って、甘露は胸を高鳴らせた。そして返事をするべく、ゆっくりと唇を開いた。

終わり

作者あとがき

　ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
　一生終わらないかと思っていたソラトも、やっと完結いたしました。「ソラト学園１」を最初に書いてからたぶん、６年以上たっているのではないかと。
　久しぶりに続きを書こうとしたところ、文体が変わってました。（汗）
　物語の全体は書き始めた頃から、なんとなくおぼろげにあったのですが、細部は決めていなかったし、最初に思い描いたものとは少し違うものになってしまったような。ファンタジーって難しいですね。辻褄合わせに苦労しました。（大汗）
　そのうえ甘露があれこれ悩むから、妙に老けちゃったし。（滝汗）
　１はオムニバスでキャラ紹介でもあったし、魔法学園の雰囲気が伝わればいいなあと考えていました。
　２では物語を書きたかったのですが、そうするとファンタジー色が強くなってしまいました。登場人物もさらに増えちゃったし。もう少し、ＢＬちっくにしたかったなあ。
　皆さん、満足していただけましたでしょうか。ファンタジーもＢＬ部分も、両方楽しんでいただけると幸いです。

　世界が火・土・風・水・木の要素で出来ているという考え方は、陰陽道の五行説をヒントにしました。元々は古代中国の考え方なのですが、五行説では木・火・土・金・水です。そのまんまもどうかと思い、金を風にしてみたのですね。
でも書いているうちに、そのまま乗っかっても良かったかな、と思うようになりました。
　最近知ったのですが、インドの考え方には風が入っているようです。世界にはいろんな考え方、思想があるってことですね。だからいっか。
　それぞれに精霊がいて、その頂点に精霊王がいるという考え方は、西洋の考え方です。（そこのところは詳しく調べなかったけど、アイルランドあたりの説でしょうか？）
　両方の考えをがっちゃんこしました。和洋折衷ですね。
　そういった骨格部分はおなじみの思想を参考にしましたが、それをどう肉付けするかはウンウンうなって捻り出したところでして、苦労したけど楽しかった。
　精霊と魔法使いの関係とか、細かい部分で悩んだのですが、また別のカタチもあったのではないかといろいろ考えたりもします。
　長さの割には登場人物が多いし、深く考えないで書き始めちゃったので、穴を繕うのが大変でしたね。（Ｔ＿Ｔ）

　２の裏テーマは、「ヒイラギに翻弄される甘露」でした。
　お陰でダイヤが割をくっちゃった。甘露とイチャイチャさせたかったのに、ずっと喧嘩してま

したね。
　主人公は甘露なのですが、ＢＬ担当はヒイラギってことで。ダブル主人公ですね。
　最後なので甘露も頑張りましたが、どこまで書いちゃっていいものか迷いましたよ。
　一応、完結しましたが、キャラに対する愛着があるので、またいつか続きを書きたいです。
　ヒイラギ編でもいいし、卒業後のお話もいいなあ。いっそリメイク版でもいいかも。
　まだ未定ですが、その時はお付き合い下さいませ。
　実は甘露とダイヤが学園にいなかった間のエピソードがあるのですが、流れが悪くなるので抜きました。
　でも折角なので、この後に入れました。オマケです。

　最後に榊原　晴さま、今回もステキなイラストをありがとうございました。
　裏主人公（？）のヒイラギと青嵐がイロッぽくて、いいなあ～。
　またお会いできますことをお祈りいたします。
　ありがとうございました。（＾＾）

２０１２年７月８日　藍生まか

不安と決意

　モミジは一人でパズルをしていた。部屋には誰もいない。いつもならヒイラギが部屋にいるのだが、その日はなかなか帰って来なかった。
　ダイヤは甘露に会うと言って出て行ったきり、何日も戻ってこない。甘露の家は遠いそうだから、往復するだけでも日数がかかる。それにダイヤは、甘露に会ったら連絡をすると言っていたので、もしかしてまだ会えてすらいないのかもしれない。
　ダイヤが出掛けた後で知ったことだが、気球が飛んでいないということだった。ダイヤはどうやって甘露のところに行くのだろう。
　ダイヤが出発するときにはそんなこととは知らずに、明るく送り出した。ヒイラギもツェロも、ダイヤを応援していると励ましていたし、笑顔で手を振るダイヤに、明るく手を振り返したのに。
（本当は行かない方が良かったんじゃないかな。今になってダイヤのことが心配になってきちゃった。甘露のことなら、放っておいても帰って来るのに）
　今日は火の精霊を持つクラスメイトが、授業中に倒れた。すぐに回復したが、その出来事は少なからず教室にショックをもたらした。木の次は火の精霊持ちが危ないのではないかと思われるからだ。原因も分からず、少しずつ悪くなっていく状況がとても怖い。
　モミジが物思いにふけっていると、部屋のドアが開いた。ヒイラギが帰ってきたのかと顔を上げると、そこには双子の白月と白玉がいた。
「こんにちは」
　二人が声をそろえて挨拶する。
「あの・・・・・・今、誰もいませんよ」
　モミジは驚いて、しどろもどろになる。モミジは双子が苦手だった。彼らの掴みどころのない雰囲気や、何を考えているのか分からない言動に戸惑う。第一、二人が同時に話しかけてくるのでどこを見ていいのか分からず、モミジはオロオロするのだ。ダイヤがどうして双子と仲がいいのか、不思議なくらいだ。だからモミジは双子と交流がなく、今、彼らが自分に会いに来たとは到底考えられなかった。
「誰もいませんよ、だって！モミジがいるじゃない！」
　双子が顔を見合わせて笑う。モミジは顔を赤くした。
「あ、あの・・・・・・」
「ヒイラギさんからの伝言だよ。双子と先に食べていてって」
「えっ！？」
　モミジが驚くと、双子が交互に教えてくれる。
「ヒイラギさんは、青嵐のところにいるんだ。授業中に青嵐が倒れたんだよ」
「ヒイラギさんは、青嵐に付き添っているよ。だから僕たちと先に食堂に行きなさいって」
　モミジは双子の言っていることを理解した。
「そうか、青嵐も火の精霊持ちだったね。そうか」

　青嵐は火と土の精霊持ちだが、土の精霊持ちであることを示す黄色のリボンをしているため、火を持っていることをつい忘れがちだ。モミジは少し考えて、双子に告げる。
「ねえ、僕も青嵐に会いに行っていいかな？キミたち、二人で食堂に行ってきなよ」
　モミジは青嵐に聞きたいことがあったし、双子と一緒に食堂に行く気になれなかったのだ。だが双子からは予想外の答えが返ってきた。
「うん、いいよ。じゃあ僕たちも一緒に行くね」
「え？・・・・・・あ、ああ、そう」
　双子は可愛らしく満面の笑みを浮かべたが、モミジにとっては不気味な微笑みでしかなかった。

　モミジは双子の案内で青嵐の部屋に行った。一人で行くつもりだったが、モミジは青嵐の部屋に行くのは初めてだったから、双子がついて来てくれて結果的に助かった。
「ここだよ。僕たちの部屋」
「え？キミたちの部屋？」
　モミジが双子の部屋かと勘違いして驚くと、白月がきひひと笑う。
「僕と青嵐の部屋」
「へ？・・・・・・あ、そうだったね」
　二人の部屋が別だということは知っていたはずなのに、なぜだか調子が狂う。顔を見合わせてクスクス笑う双子を無視して、モミジはノックすると部屋に入った。双子も後ろについてスルリと部屋に入ると、さっさと白月のベッドに並んで腰かける。
　部屋には二人分の家具があり、青嵐はもう一つのベッドに横たわっていた。眠っているようだ。顔色が悪い。彼の他にはヒイラギと、先生と思しき女性が一人いた。
　ヒイラギがモミジの顔を見て、少し微笑む。
「来たのか。さっきまで大変だったんだよ。タイミングよくマズルカ先生が来て下さって、助かった」
　マズルカ先生。その名前はどこかで聞いたことがあると、モミジは思った。必死で考える。
（青嵐の口から聞いた気がする・・・・・・僕が東雲さんの服を汚したとき、青嵐がマズルカ先生に頼んでやろうかって言ったんだっけ？青嵐と親しい先生なのかな。僕は東雲さんに見とれていてちゃんと聞いてなかったけど、そうだ、ダイヤが後でシミ抜き先生って言ってた人だ！）
「あ！シミ抜きの」
　思わずそう言って、慌てて口をふさぐ。
　マズルカは振り向いてモミジを見ると、微笑んだ。
「シミ抜き以外のことも出来るのよ。眠らせるとかね」
「ごめんなさい」
　マズルカはキュートな女性だった。ふんわりとカールした髪は彼女が動くとゆらゆらと揺れる

。幼い顔立ちにぷっくりとした唇がセクシーだ。モミジはたちまち顔を赤くして、ぼうっとなった。マズルカはクスッと笑うとヒイラギに向き直る。
「後は任せたわね。明日また様子を見に来るつもりだけど、何かあったら連絡してちょうだい」
「ありがとうございます」
　ヒイラギがお礼を言うと、マズルカが肩をすくめる。
「私は先生だもの、当たり前でしょ。むしろこの状況をどうにも出来ないことが申し訳ないくらいよ」
「学園側は、何もしないのですか？」
「情報収集はしているわ。記録によると、昔にもこんなことがあったからみたいだから、今はまだ様子見ね。精霊界はデリケートだから、ある程度は波があるの。これ以上ひどいことになるとちょっと厄介だけど、また自然にバランスがとれるわよ」
「バランスですか」
「そうよ、バランス。じゃあよろしくね」
　マズルカは手をひらひらさせ、双子にも手を振って、軽い足取りで出て行った。モミジはその時まで、双子の存在を忘れていた。まるでベッドの上の置物みたいに静かに座っている。
　マズルカがいなくなっても甘い香りが漂っていて、モミジは少しの間、夢の余韻のようにぼんやりしていた。ふと青嵐のサイドテーブルに目をやると、白いアロマポッドが置いてあった。マズルカが置いたのだろうか。香りはそこから漂っていて、モミジは眠りに誘われそうな心地がしていた。
「モミジ、そこの椅子に座ったら？」
　ヒイラギの声に、やっと目が覚めたような気分になる。モミジが言われるままに腰掛けると、ヒイラギは青嵐が寝ている横に腰掛けた。
「ねえヒイラギ、学園では毎日祈祷をしてるって聞いたよ」
「それでも良くならないじゃないか。青嵐まで倒れてしまって、俺はどうすればいいんだ」
　ヒイラギがつらそうに顔を伏せる。モミジは少し驚いてヒイラギを見た。
（こんなヒイラギは初めて見た。いつも冷静なヒイラギも、やっぱり不安なんだ。僕はどうすればいいんだろう。ヒイラギがこんなだと、僕まで不安になっちゃう。ダイヤもいないのに）
「ねえ、ヒイラギ覚えてる？何日か前に食堂で、青嵐がダイヤに声をかけてきたことがあったよね？」
「ああ、覚えているよ。そんなこともあったね」
「青嵐はダイヤに、精霊の様子がおかしくないかって聞いてなかったっけ？あれどういう意味だったんだろう。もしかして青嵐は、あの時から気付いていたんじゃないかな。僕、それがずっと気になっているんだ」
「そうだ」
　急にベッドの方から声がして、モミジは驚いた。ヒイラギがすぐに立ちあがって顔を覗き込む。
「気が付いたか？」

「ああ、すまない。心配をかけたみたいだな」
　青嵐は少し微笑んで見せたが、弱々しい笑顔が却って彼のダメージの大きさを感じさせた。
（まだ顔色が悪いなあ。大丈夫ってわけではなさそう）
　少し人見知り気味のモミジは、青嵐が目覚めると途端に無口になった。今まで青嵐とは話したことがない。逆に双子は元気になった。
「青嵐！！」
　同時にそう言って、ベッドに駆け寄る。ヒイラギは双子に場所を譲った。
「青嵐、大丈夫？」
「僕たち心配したんだよ」
「僕らのクラスの子も倒れたんだよ」
「青嵐は大丈夫だよね？」
　双子が交互に言うので、青嵐は苦笑する。
「心配かけて悪かったな。もう大丈夫だよ」
　モミジは慎重に口を開いた。
「青嵐・・・・・・さん。あの、こうなることは前から知っていたの？」
　皆が黙って青嵐の答えを待った。青嵐は少し考えて言う。
「いや。具体的にどうなるのか分かっていたわけではないよ。ただ、オレの土の精霊が気になることを言っていたんだ。バランスが崩れたって」
「バランス？さっき、マズルカ先生もそんなこと言ってた」
「そうだ。この世界は火・土・風・水・木の要素で出来ている。どれが強くても弱くてもいけないんだ。バランスが大切なのさ。こうなって分かったことは、木が弱くなったことでバランスが崩れ、もともと制御が難しい火の力が不安定になっているってことかな」
「じゃあバランスが崩れたままなら、いずれ他の力も危ないってこと？」
「そういうことになる」
（それって結構、ヤバイんじゃあないかな。先生はあんなことを仰っていたけど、のんびりし過ぎじゃないかしら）
　モミジの心配をよそに、白玉は感嘆の声をあげる。
「青嵐の精霊って、そんなことを教えてくれるの？すごいね」
「どうやらオレについてる土の精霊は、トップに近いところにいるようだ。それにフレンドリーな性格だからな」
　青嵐は簡単なことのように言うが、モミジなどは自分の精霊の声を二回しか聞いたことがなく、性格など分かるはずもない。それが普通だった。
（精霊に聞く？そんなこと考えたこともなかった。だって彼らは気まぐれだし、傍観者だと思っていたから）
「じゃあ、どうすればいいかも教えてくれるの？」
　白月の質問に、青嵐は顔を硬くした。
「甘露だ」

「甘露？」
「オレも確信が持てずにいるが、たぶん鍵を握っているのは甘露だ。ヒイラギ、ダイヤが出て行って何日になる？」
「二日・・・・・・いや、三日になるかな」
「無事に甘露に会えただろうか。どこかで足止めをくっているかもしれないな」
「まさかお前みたいに、倒れてるってことは？」
　最悪の想像に、皆が黙りこむ。ややあって、青嵐は希望的な発言をした。
「ダイヤは精霊を三人持っている。おそらくオレよりもバランスがいいはずだ。大丈夫、無事に甘露を連れて帰ってくるよ」
　青嵐が明るく言うので、モミジは少しホッとした。ダイヤのことが心配だった。でも希望を持ちたいし、何かあれば青嵐とヒイラギが何とかしてくれるのではないかと期待する。
「さあ、これで安心しただろ？三人で食事に行っておいで」
　ヒイラギがモミジの肩に手をやる。
「ヒイラギは？」
「オレはもう少し青嵐と話がある。いいから行っておいで。白月、白玉。モミジをよろしく」
「行こう、モミジ」
　モミジは双子に両側から手をとられ、半ば強制的に部屋から連れ出された。廊下に出ても、双子がぴったりとくっついてくる。
「ちょ、ちょっと。そんなことしなくても行くよ」
「モミジがお子様だからさ」
「僕の方がお兄さんだろ」
　双子は顔を見合わせてニヤリとする。モミジはヒイラギといたかったと、恨めしく思った。

「行ったか？」
「行った」
「念のために結界を・・・・・・」
「張った」
　それだけ確認してやっと、青嵐はふうっと息をつく。それを見てヒイラギは苦笑した。
「無理してるんだろ？まだ目を開けているのもつらいんじゃないか？」
「お見通し？そうだ。かなりキツイ。だから大事なことを先に言うぞ」
　青嵐がまじめな顔で言うので、ヒイラギは青嵐の声がよく聞こえるようにベッドに近寄った。
「明日、甘露に手紙を飛ばしてくれ」
「手紙？」
「そうだ。マズルカ先生に頼めば、鳥を飛ばしてくれる。さっきはああ言ったけど、やはり心配だから出来る限りのことはしよう。甘露に帰ってくるように頼んでくれ。ダイヤのことは心配す

るから書くなよ。会えていればいいんだが、まだだろう」
「分かった。じゃあダイヤの方はどうすればいい？」
「ダイヤには頑張ってもらうしかない。どのみち甘露が戻らないことには、ダイヤも救えない。ダイヤも、世界も」
「そこのところはよく分からないけど、お前を信じよう」
　青嵐はかすかに微笑んだ。
「土の精霊も具体的なことは教えてくれないんだ。でも甘露の精霊が重要だということは、分かっている。甘露に会って、覚醒を促すよ。あとは甘露の精霊がオレたちの味方をしてくれれば、甘露がどうにか」
「どうにか？」
「たぶん・・・・・・オレの予想では精霊王が絡んでいる。だから土の精霊もはっきりとは言えないんだ」
「そういえば、前にもそんなことを言っていたな」
「そうだ。・・・・・・それよりヒイラギ、今日はありがとう。迷惑をかけたな」
「迷惑だなんて。心配したよ」
　ヒイラギは冷たい手で青嵐の頬に触れた。少し熱いようだ。熱があるのかもしれない。
（もしかして甘露が戻らなければ、青嵐はこのままなのだろうか）
　ふとそんな思いがよぎり、ヒイラギは不安になった。いつも余裕たっぷりの青嵐が、まさか自分より先に倒れるとは思わなかった。火の精霊は両刃の剣ということか。強い力を持つが、コントロールが上手くいかないと使い手がダメージを受けるのだ。
　オデコに手をやり心配して見つめると、青嵐が嬉しそうな顔をする。
「サービスがいいね。お前がこんなに表立って動いてくれるとは正直、思っていなかったよ。いつも皆の前では、知らん顔をしていただろう？」
「非常時なんだから、クラスメイトを助けるのは当たり前だ」
　さらりと言うヒイラギに、青嵐はクスリと笑う。
「こんなに近くにいるのに、抱きしめることも出来ないなんて。残念だよ」
「動けなくても、口だけは達者なようだな。でももう、眠った方がいい。後のことは任せてくれ」
（俺がしっかりしなくては。世界のことなんてどうでもいいけれど、何があっても俺は、青嵐を守る）
　青嵐の不調で挫けそうだった心を入れ替え、ヒイラギは強くなりたいと思う。
「頼もしいね」
　なおも喋ろうとする青嵐の口を、ヒイラギは唇で黙らせた。ヒイラギから仕掛けたキスは情熱的で、青嵐の残りの体力まで奪う、攻めのキスだ。
（セイラン、俺の青嵐。元気にならないと許さない）
　強い決意で気分が高揚し、興奮してきたヒイラギは青嵐の唇を強く吸った。
「ヒイラ・・・・・・」

　唇が離れた隙に青嵐が声をあげたが、ヒイラギは無視して再び唇を合わせる。角度を変えて何度もキスした。すぐに青嵐も応えてきたので、舌を絡め合う。柔らかな舌を舐め、互いにさぐり合っていると、あまりの気持ちよさに我を忘れそうだ。胸はどきどきしているし、背中には電気が走っているようなむず痒さがある。
（ああ、気持ちいい・・・・・・感じすぎて困ってしまう。腰がヤバイ感じになってきた。キスだけでこんなになるなんて、もしこれ以上・・・・・・どうなってしまうんだろう。青嵐の全てを知りたい。俺しか知らない青嵐を見たい）
　いつもされるがままだったヒイラギから仕掛けたことで、彼は自分にも征服欲があることに気付く。青嵐の全てを暴き、自分だけのものにしてしまいたいという欲だ。
「ん、・・・・・・ん」
　その時、青嵐に服を引っ張られていることに気が付き、我に返る。体を動かすこともつらいであろう青嵐が、いつの間にか手を伸ばしヒイラギの服を掴んでいたようだ。
（しまった、夢中になり過ぎた）
　名残惜しく唇が離れる。青嵐がトロンとした目をしていた。
　それを見て、ヒイラギは再び欲望に火がつきそうになったが、理性で抑えこみ眠りの呪文を唱える。
「・・・・・・おやすみ、青嵐」
　青嵐は何か言いたそうだったが呪文に勝てず、眠った。

ソラト学園　2

http://p.booklog.jp/book/53340

著者：藍生まか
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maka7/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/53340

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/53340

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ